
魔法を信じるかい

工房径

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法を信じるかい

【Nコード】

N0498Q

【作者名】

工房径

【あらすじ】

智は仕事が大好きな前向き思考のショップ店員。そんな彼女が、同じビルのヘアアクセサリー店に働く真也と知り合う。自分を煙に巻く黒豹みたいな真也に振り回されながら、智は彼の真意を知りたいと思うのだが……。沿線恋物語シリーズ第4弾。本編・番外編全て完結しました。番外編は？「ずっと、冬のままで」の真紀・周平視点、？極甘指向のあの日の夜、？二人の甘い結婚騒動、？新作カップルのヴァレンタイン話の4本です！

飛び出した弾丸

女の子向けのショップ店員は断固女の子であるべき、と言うのが^{とも}智の持論だ。

だって男にわかるわけない。メイクがつかないようにとか、ブラのストラップが見えるかどうかとか。いつか見たテレビで、某メガネ屋が従業員全員に眼鏡をかけさせているという話に、部屋に一人だったにも関わらず「すっぱらしいっ！」と拍手してしまった位だ。智は接客のために努力を惜しまない。自分でなくちゃできない仕事をしたい。そう意気込んでいた。

その日智は同じビルの1階に入っているヘアアクセサリー「ブルーム」に向かっていた。そこには最近友達になった里奈が働いている。彼女もまた誇りを持って働くショップ店員で、ただ売るだけで満足していない。シュシュやバレッタのサンプルを持ってきては、ストレートヘアの自分とミルクティー色のウエーブのかかった智の髪でいろいろと研究している。何でも店長に刺激を受けているという。センスがよく指示は的確で部下への気配りも半端でないらしい。今日は里奈にシュシュを見立ててもらうことになっていた。

店に入るとシュシュやバレッタ、ターバンなどが溢れており、ディスプレイ毎に商品を分けている。ポップなもの、オフィス向け、ドレスアップした時のシックなもの。それが似合う服を身につけた小さな可愛いドールを配置したのは何を隠そう里奈のアイディアだった。智もドールの服のコーディネートを手伝った。自分も関わった店をご機嫌で覗いたが、あれ、里奈は？さらさらの黒いロングヘアを探したが見当たらない。

「何かお探しですか？」

後ろから声を掛けられて振り向くと、背の高い30代前半くらいの男性が立っていた。にこやかに微笑んでいるけど、ウェーブのかった黒い肩までの髪をワックスでつややかに整えて、片耳にピアス、手にはごついシルバーの指輪。侮れない感じ。黒いサテンのシヤツは、衿を大きく開けていればちよつとホストみたい。

「あの、あたし相川里奈さんの友達で・・・」

「ああ！」

彼はわかった、と顔を輝かせた。大きい口は笑顔になるとさらに大きく開いて、身体の小さい智はとって食われそうだ。

「いつもお世話になってます。コーディネート手伝ってくれた『フルムーン』の栗山智さん、ですよね」

名前まで知られるとは！智は慌ててぺこりと礼をした。

「店長の神崎真也です」

彼は名刺までとりだしてうやうやしく智に差し出した。え、店長！これが噂の！里奈ったら店長が男性なんて聞いてない！しかもあたし、今名刺持ってないし！そんな智の動揺に真也はいいよ、というように手で制した。

「里奈ちゃんね、風邪ひいちゃってね」

「えっ！」

「がんばってただけど熱が出ちゃってねえ、皆にうつされても困るんで帰ってもらったんだ」

あらら。そういえば夕べの電話の時咳してたっけ。でも帰るならメールでもくれたかな。慌てて携帯をチェックするが着信はなかった。よほど具合が悪かったのか。仕方ない、出直そう。

「そうですか、じゃまた今度にします。じゃ、私はこれで」
早々に引き上げようとすると、店長はぴらぴらと小さな紙を振った。

「これな〜んだ」

「へっ？」

彼がにんまりとしてその紙をみせる。

「T O T O M O

約束してたのにホントごめん！

38度になってしまった（><）！

帰るけどシュシュはこの際だから店長にチョイスしてもらって？

センスは保証する！

R i

na」

・・・うう、里奈め！こんな大人な男にシュシュを選んでもらうなんて。無理、色んな意味で絶対無理！智がぐつと黙ると、真也はにゅと笑って、

「男を信用してないんだって？」

とシュシュを取り出しながら智をのぞき込んだ。里奈ったら何話してんのよ！智は混乱して真っ赤になった。

「信用してないのとは違うんですけど！」

「まあ、いいや。じゃ、これ、試してみて」

彼が差し出したのは、シルバーのモロッコ風のボタン飾りにビンテージ風の琥珀色のビーズやウッドビーズが組み合わされたブラウンのシュシュだった。エスニック調で素敵だけど私にはちよつと地味？

「君の髪色は明るいから、どうしてもちよつとポップになるし、派手にするとギャル風になっちゃうでしょ」

真也は腰のベルトに通した黒いスタッズのついたシザースバッグから小さなブラシを取り出すと、躊躇なく智の髪をとかした。

「えっ」

戸惑う智の髪を上半分だけブロッキングするとくるっと一部だけ団子にしてそこに先程のシュシュを手際よくくるくると巻き付けた。

「どう？」

あつという間だ。彼は智を奥の鏡の前に立たせた。自分の姿を映してびっくりした。少し後れ毛を残してサイドとトップをまとめた

だけで、顎の線が引き立ちすごく大人びる。彼が後ろから差し出す鏡を見ると、ボタンのシルバーとビーズの茶が無造作にまとめたシニヨンを決めすぎずラフにまとめて色っぽささえある。

「うわあ」

智が驚嘆の声を上げると、真也も嬉しそうに笑った。

「それだとお店の色んな服に使えるでしょ。今年多いファー使いの衿にもいいし」

智は驚きと尊敬の眼差しを遠慮なくぶつけた。真也は「君って里奈ちゃんに聞いたとおりの人だねえ」とクスクス笑う。

「聞いたとおりって？」

「仕事バカで前向きだけど、素直でたまされやすいって」

「なっ、」

「ね、男も良い仕事するでしょ？」

笑うと大きな口が三日月みたいな綺麗な弧を描く。ああ、良い笑顔だなあ。

こんな状況なのに思わず見とれてしまう。

「そのシュシュはあげる、こないだ手伝ったくれたお礼。それに、」

笑みを浮かべたまま智の目をじつとのぞき込む、深い瞳の色。

「そこまで喜んでもらえたら、僕も嬉しい」

ときゅん。胸のピストルの音がする。

その瞬間、智は恋をしてしまった。

一筋縄ではいかない、しなやかな黒豹のようなこの男に。

食えない男

「ごめんごめん、だつてさあ」

智が神崎真也に衝撃の出会いをして3日後、風邪が治ってブルームに出勤した里奈を、智はやつと捕まえた。

「智は、その男への偏見だけはいただけないからね。前にも話したとおり店長いい人だよ？すつごく仕事出来るし」

「・・・確かに、出来るのは認めるよ」

二人はビルの2階にある喫茶「June」でランチを摂っていた。一見古ぼけた店だけれど、このコーヒーは美味しい。その上マスタアの娘さんが作るランチが絶品なのだ。トーストしたパンを一口大に切つてシーザーサラダにあえたディッシュや、ナッツやレーズンの入った五穀米をつかった豆のカレーとか。娘さんはランチの時と、夜にバーになった時おつまみを作りに来る。ちよつと陰がある感じの美人で、密かなファンも多いらしかった。このビル内の店員なら割引クーポンが使えるので、智はよくここを利用していた。

「それにしても里奈、あんたなんで私のこと店長にべらべら話してんのよ」

「だつてえ、智の話題だと盛り上がるんだもん」

里奈はぺろつと舌を出した。

「お待たせしました」

ランチはパスタとサンドイッチの2種類で、二人はパスタをチョイスした。冬野菜のカルボナーラグラタンはスパゲティーにカリフラワーや人参、ほうれん草が入った焼きカルボナーラだ。熱々のそれを頼張っていると、

「あれ、お二人さん」

噂をすれば真也がやってきた。今日は白いシャツにグレイのカーゴパンツ。いつも付けているシザーバッグはいくつも持っているらしく、今日のは淡いパープル。髪は後ろで一つにまとめているが、

モロッコ風のシルバーのボタンと淡い紫のビーズが付いたシュシュで、智のと色違いだった。

「あー、真也さん、智とおそろだ〜」

里奈が冷やかす。真也は店長と呼ばれるのを嫌い、皆に名前ではせていた。

「わかる？ねえ、智ちゃん、俺たち仲良しだもんねえ。ほら男でも髪伸ばせばこうやってシュシュの具合とか試せるでしょ、どう？」

嫌みな男だ。智はわざとそっぽを向く。

「あれ、つれないな」

真也は笑いながら二人から離れてカウンターに陣取った。

「順、今日のサンドイッチ何？」

順と呼ばれたマスターの娘は顔を上げて、

「バケットのサンドイッチ。アンチヨビバターとベーコンとアボカドの。真ちゃんアンチヨビ好きでしょ。アボカドは抜いてレタスにしたげる」

「ん、じゃそれ」

真也は頷いて頬杖をつく。親しげな雰囲気圧倒された。順は智よりいくつか年上らしいが物憂げな感じが大人っぽく、一癖ある美形の真也といっても引けを取らない。自分がうんと子どもに思えた。

「とーも」

里奈が智の頬を突く。

「顔、怖いって」

「え」

驚いて里奈を見るとにんまりして、

「わっかりやす」

パスタの最後の一口を口の中に放りこんだ

「何が！」

「ふふ、あの二人ね親同士が中学からの同級生なんだって。いわゆる幼なじみ。ま、おたがいオーナーと店子たなこだし仲良くしないといけないしね」

「オーナーと店子？」

話が見えない。

「あ、話してなかったっけ？真也さんてさ・・・」

「里奈ちゃん、君はそろそろ休憩時間終了よ？」

真也さんが店長の顔になって腕時計を指した。里奈はうわっ、と
いつて残りのコーヒーを慌ててすするとクーポン券をテーブルに置
いて飛び出していった。後に取り残された智は所在なさに真也を
見つめる。

「・・・僕のが気になる？」

テーブルに肘をついたまま、にやりと肉食獣の不敵な笑みを浮か
べて。

「何が、知りたい？何でも教えてあげる」

自分がもてるのを分かっていて言う台詞だ。智は弾けるように立
ち上がった。

「そーいうの、嫌いです！」

「は？」

「自意識過剰で、女を見ればからかう様な男は、嫌いだ、って言っ
てるんです！」

そしてそんな男を好きになってしまった自分が嫌い！智は泣きそ
うになって駆け出した。買い出しに行つて戻ってきたマスターにぶ
つかりそうになり、一礼をして飛び出していく。

「あれ、智ちゃん？」

マスターは智の後ろ姿を見ながら言った。

「うちの店に何か憑いてんのかなあ。女の子が突然逃げるの、何か
の流行？」

予期せぬ来訪

我ながら大人げないと思う。

社会人として、同じビルで働くものとして、あれはまずかった。でも、からかったのはあつちで・・・ううん、わかつてる。これはやきもちだ。彼は私なんか肩を並べられる男じゃない。似合うのはもっと大人な冗談も笑って交わせる、そうあの順さんみたいな人。「さあ、仕事、仕事」

今日は店長が出張で一人きり。暇なら暇でダイレクトメールをかいたり、帳簿を確認したりやることは山のようにあるのだ。さしあたって智は新しく入荷した服の確認を始めた。

すると一人のスーツ姿の女性が店に入ってきた。いらつしやいませ、といいながら素早く観察する。うちの店に来るには年齢が高い、50から60代といったところか。しかしプラチナ色のメッシュがところどころ入った肩までの髪、洗練された身のこなし。仕立ての良いスーツに無駄のない身体。ぴかぴかに磨かれた靴や表情にも自信が満ちあふれてただ者ではないと感じる。

「どういったものをお探しですか」

智は遠慮がちに声をかけると、彼女ははっとして智を見た。そして上から下までさつと目を光らせると名札に目をとめた。

「今日は木暮さんは休み？」

「店長はいにく出張で。申し訳ありません」

店長のお客さまか。赤いルージュが華やかな彼女は「まあいいわ」といいながら、

「私でも着られるようなものあるかしら」

と智を見た。

『それぞれのお客様にあつた言葉遣いやコーディネートを、その方を見ただけで瞬時に見繕わなきゃ駄目。年かさの人にはその語尾が

だらしく伸びる話し方はNGよ!」

いつも店長に散々注意されていることを思い出しながら智は話した。

「お客様のお召しになっているような良い品はありませんが、カジユアルなお出かけ着などはございます」

「いいわね。こんど旅行に行く予定があるの」

彼女は多分値段は気にせず着心地やデザインを選ぶに違いない。そして旅行なら晴れやかに。智は2、3枚明るい色のトップスをだした。淡いオレンジ色が彼女の髪色と肌色によく映える。

「こちらのトップスはお客様のお顔映りもいいですし、伸びが良くて旅行鞆に入れても皺になりにくいです。このスカートと合わせる同素材ですっきりみえますよ。フレアなので乗り物の中でもくつろげます。お気に召しましたら同じ柔らかな素材のジャケットもございます。上下で揃えればホテルのディナーでもばっちりです」

智は緊張しながらそれでも夢中で話し続けた。女性はこのようにしながら智の言葉に耳を傾けていたが、

「ほんとにあなたって聞いた通りの人ね」

と突然言っただけでびくりして顔をみた。どこかで聞いた台詞だ。「ええと?」

「私の顔知らないのね?」

いたずらっぽく笑うとさらにチャームिंगだ。綺麗な革の名刺入れから赤い爪がさつと名刺を引き出す。

「美容室『スプリング』店長、神崎千春・・・って、あつ!」

誰かに聞いたことがある。5階の美容室店長イコール神崎ビルオーナー。その図式がどんと目の前に落ちてきた。

「オーナーさん・・・」

と同時に、里奈の言っていた言葉がふつと甦った。

『お互いオーナーと店子だし、仲良くしなくちゃね』

あれは真也さんと順さんのことだった。真也さん、神崎、真也・・・。

「あの、もしかして、ブルームの店長さんて」

「真也？私の長男。美容室は次男とやっているのだけれど」

ああ、神様！オーナーの長男を罵ってしまいました・・・！青くなる智をオーナーは面白そうに見て、

「あなたのことは木暮さんとか賢ちゃんとかいろんな所から入ってくるのよ」

「賢ちゃんといいますと」

「June のマスター。中学からの同級生だから」

もう、嫌だ。完全なる包囲網だ。

「真也に怒鳴ったんですってね」

それはもう嬉しそうに。この人お母さんだよな？

「言ってやって。あの子自信家に見えてちよっと屈折してるから」

「屈折、ですか」

「そ、私の育て方が悪かったんだろうけど」

千春は一瞬淋しそうな目になった。智は慌てて、

「真也さん、素晴らしい方じゃないですか。ブルームに勤めてる私の友達はいつも尊敬してるって話してますよ。こないだも私が伺ったとき、このシユシユをささっと、もう魔法みたいに」

自分の髪についているシユシユを見せた。

「うーん、まあ、それは元美容師だし」

「は？」

元美容師？ああそうか！智の中ではちんぱちゃんとパズルのピースがはまってゆく。髪の毛の扱いがうまいのも、女のあしらいに長けていのも、そのせいか！

「あなた、怒ったくせに真也の肩を持つね。真也の彼女？」

千春は智のシユシユを見ながら何気ないように聞く。

「はあっ？」

滅相もございません！智はひれ伏すように千春に縋りながら、

「まだ2回しかあったことないんですよ！こないだも挑発に乗ってしまっただけでっ、私が子供だから！」

「・・・」

千春はそんな智に微笑み、優しい目で見つめた。

「あなた良い子ね。裏表がなくて、仕事には熱意があって」

「はあ」

「・・・変なことと言ってごめんなさいね。この服試着させて下さる？」

結局千春は智の勧めた服を全て買い求めて去っていった。送りだした後、智は大きく息をついてぺたんと椅子に腰掛ける。さすがオーナー、あの存在感。失礼はなかったかな。今になって色んなことが悔やまれるが、ああ、後の祭りだ。

気持ちが悪く落ちてくると、また真也のことが気に懸かってくる。今なら分かる、あの鮮やかな手際は彼の努力の賜。好きだったんだ、美容師という仕事。軽く冗談めいた口調も、彼の仕事に対する情熱は隠せない。

お母さんが美容師で弟も美容師、そしてオーナーの長男で。免許をとるのも大変だっただろう美容師をやめて、彼はなぜあの店の店長をしているのだろうか。

揺れる花束

真也が智の働く「フルムーン」にやってきたのは、彼の母千春が訪れた翌日だった。

デスクでDMを書いている時ふと手元に影が差し、条件反射で「いらっしやいませ」と言っただけで顔を上げた。男にしては長い睫毛に縁取られた強い瞳が自分を見つめているのに気付き、思わず飛び退く。

「何よ、その反応。俺は猛獣か」

にやつと微笑んだ真也だったが、すぐに真顔になり、

「・・・こないだは悪かった」

と決まり悪そうに差し出したのは、白いチューリップと淡いピンクのスィートピーがメインの、思わず笑みが零れてしまうような可愛らしいブーケ。

冷静になると、わざと興ざめなことを考える。女の扱いに慣れた手口だ。私は彼にとってやっぱり子供なんだろう、薔薇でも百合でも、ましてや蘭でもない。

・・・とはいっても、春を告げる花には罪はなくて。好きな人にもらった花束が嬉しくない訳がない。智は上気する頬を半分花に隠して、

「ありがとうございます」

とやつと口にした。真也はその途端ぱあっと笑顔になる。

「ごめんな、ほんと」

「いえ、ここまでしていただくようなことは」

「俺、賢さんやお袋に怒られちゃってさ。あんな良い子に何してんだって」

やっぱり焚きつけられたからか。智はちょっと気落ちした。

「こちらこそ失礼しました。オーナーのご子息とは存じませんで」

「嫌みだねえ、そのとってつけたみたいな敬語。君と僕には直接の

雇用関係はないでしょ」

智は顔をのぞき込まれて赤面した。

「また、店に来てよ。いろいろ見繕ったげる。せつかく綺麗な髪なんだから、いろいろ試そう」

そう言つて、また、髪に触れる。思わずびくつとしてしまう。元美容師、元美容師なんだからと呪文のように唱えて、はつとした。そういえば。訊いても良いだろうか。

「あの、もし嫌だったら、答えなくってもいいんですけど」

「ん、なあに？」

「どうして美容師、やめちゃったんですか？」

よく訊かれるのかもしれない。一瞬淋しそうな顔をしたがすぐ笑顔に戻つて、

「僕、アレルギー体質なんだよ」

と言つた。

「アレルギー？」

「うんそう。小さい頃からアトピーでね、あとキウイなんか食べるとのどがイガイガして駄目だし。それで美容師始めた頃、パーマ液やヘアダイで手がすごく荒れて。ゴム手袋使ってたんだけど」

彼は手を擦つた。今の手は白くて長い指が綺麗で、とてもそんな風には見えない。

「ある時喘息みたいになっちゃってね。アレルギーのショックになつて入院しちゃったんだ」

入院。思わぬ話に智は自分の手をぎゅつと握りしめた。

「もう動悸はするしヒーヒーして息が継げなくなっちゃってね。一時点滴と酸素吸入までして。治つてからもいろいろ検査したんだけど、どうもラテックスアレルギーじゃないかっていうんだよね」

「ラテックス？」

「ゴムのこと。なんかキウイやアボカドとか駄目な人に多いらしいんだ」

『アボカド抜いてレタスにしたげる』と順が言っていた意味がよ

うやく分かった。好き嫌いじゃない、アレルギーだったんだ。

「違う手袋使うとか手はあったのかもしれないけど、下っ端のペーパーが忙しい時にそんなこと言ってられないし。医者に行つてばかりで休みが多くて給料泥棒みたいに思われるし、それで結局美容室をやめたわけ」

こんな髪をいじるのが好きな人が。諦めたような淋しい笑みに胸が痛くなる。

「うち、父親が早くに亡くなって女手一つで育ててもらったからさ。早く独り立ちしたかったんだけどね。なにやったらいいかかんなくてぶらぶらしてたら、ビルにヘアアクセの店を入れるからやってみないかって言われて店長になって。結局親の七光りで食いつないでるわけ。長男なのに情けないけど、働けるだけ有り難いと思わないとね、って・・・えっ」

智の顔を見て真也が固まった。

「なに泣いてんの」

そついわれて初めて瞳が濡れているのに気付く。自覚すると涙は後から後からぼろぼろとこぼれ落ちて、智は子供みたいに手で頬をぬぐった。

「だって、真也さん、頑張つて美容師さんになったんでしょ？仕事、大好きだったでしょ？お母様とか弟さんも美容師してて、それを見ながらひとりでやめなきゃならないなんて」

真也はほうつと息をついて哀しげな微笑みを浮かべると、智の頭を撫でた。

「・・・そんなことまで考えられるなんて、君は優しい子だね。俺、なんで君にここまで話しちゃったんだろ、ごめんな」

真也は顔を少しだけ歪ませたが、

「いけね、君、仕事だった」

真也は花束を持って智の肩を押してバックヤードに戻った。中では店長の木暮がお茶を飲んでいて、泣きはらした智と花を持った真也を見て驚いて立ち上がった。

「なあに、どうしたの」

「すみません、仕事中だったのに。俺が泣きました」

店長は眉をひそめ、花束を見て曲解したようだった。

「困るわ、真也さん、プライベートは仕事終わりにしてよ。女は花に弱いものでしょ」

「そんなんじゃないんだけど。弱ったな、俺も戻らなきゃ」

真也はぼん、と智の頭を叩くと、

「ごめんね、悪いことした。俺、時間だから戻るね」

と耳元に囁いた。そして「すみません、頼みます」と木暮に言う
と店を出て行った。

ふわりと揺れる春色のブーケをテーブルに残して。

私のお気に入り

その日店で棚卸しがあり、遅くなった智は疲れた身体を引き摺ってロツカールームへ向かっていた。女子のロツカールームは5階にある。ちょうど美容室「スプリング」の真向かい、ダンススタジオの脇の通路を通った奥だ。スタジオのスケジュールはいつも通るので覚えてしまった。月曜・木曜はエアロビクス、火曜はヨガ、水曜はフラメンコ。そして今日金曜日はタップ・ダンス。

「あれ、今日は曲が違う」

最近の発表会が近いらしく、いつも「雨に唄えば」がかかっていたのに。

印象的なジャズピアノのイントロ。実家の父親がよく聞いていた、すっかり智の身体に染みついている曲だ。このジャズワルツの前奏は列車の揺れを思わせる2拍目アクセントの3拍子。5拍子みたいなりズムで「来いよ、来いよ」と主旋律の滑り出しを煽る。

コルトレーンの「My Favorite Things」だ。

思わずガラス張りのスタジオを見ると、珍しく男性2人だけだ。同じ上下黒のシンプルな衣装に、ボルサリーノ風の天辺が割れたソフト帽で顔を隠し鏡に向かって立っている。

ピアノのイントロが高まり、二人がステップを踏み出す。タタタ、タン。タタタ、タ、タン。二人は帽子を右手に持ったまま手を大きく広げた。ひとりには白髪交じりの眼鏡の男性、もうひとりにはウエーブのかかった黒髪、見透かすような強い眼差し、情熱的な大きな唇・・・真也だ！

途端コルトレーンのサクスが火を噴く。この難解なりズム。乗るだけでも大変だと思うのに、身のこなしは華やかでいてクールで、両手を高く上げた時の背中からのラインを辿ると、服の上からでも

引き締まった身体なのが見て取れる。もう一人の年配の男性も負けではない、品良く軽やかなステップだ。

「さすがにこの長さは無理！縮めようよ、斉藤さん」

「まだまだ！若いでしょ、真也君」

「もう30過ぎですよ！あんまり長いと観客が飽きますって」

ふたりは笑いながら楽しそうに踊る。思わず足でリズムをと

りながら乗り出すように見ていると、真也と目が合う。気付かれた！

彼は笑って智に手を振ると、

「これは頑張らないと！」

と叫び、智の方に向き直ってステップを大きくした。見せ場らしく二人が掛け合う様に交互に踊りながら挑むように前に出てくる。

最後に重なり合うようにポーズを決めて止まった。

「すごい！」

と智は叫んで思いきり拍手をしてしまった。

「女の子がいると俄然張り切り方が違うね」

斉藤と呼ばれた年配の男性がタオルで汗を拭きながら真也を小突いた。

「そりゃあ、もう」

久しぶりを見る、真也の満面の笑顔。ああ、やっぱりいいな。智は惚れ惚れしながらその顔を見上げた。斉藤が微笑ましく二人を見ている。

「いいねえ、真也君の彼女？」

「いえ！違います！」

「即答？智ちゃん、つれないなあ」

懲りずにからかう真也をたしなめるように見た。そういえばこないだ花をもらって泣いた日から会うのは初めてだ。そう思うと気まぐずくて、今更ながら智は下を向いた。

「智ちゃん、もう帰り？送ってくよ」

「いえ、電車なんです。駅まで歩くだけですから」

「もう遅いよ、危ないから。どうせ僕も帰るし」

そう言って自分のタオルを智に放った。

「それ預けたから。待ってて」

彼は文句は言わせない、と言うように人差し指を智に向けると、着替えに戻っていった。

「智ちゃん、一人暮らし？」

「はい、ここから一駅先の浅葱なんですけど。前は健康も兼ねて歩きで来てたんですけど、店長から『夜は危ないから絶対定期買いなさい』って言われて」

「智ちゃんは皆に愛されてるよね」

真也に言われると、どきっとする。本当に愛されたいのはあなたからだ、そういつてしまいそう。慌てて話を切り替える。

「タップ、お上手ですね。コルトレーンのあの曲、リズム難しいのに」

「コルトレーン知ってる？意外だねえ」

「父が嫌なことがあったとき、ウイスキー片手によく聞くんですよ」
なるほど、と真也は頷いた。

「それこそ My Favorite Things の神髄だ。辛い時にお気に入りを出すと気分が晴れるって曲だもん。いいお父さんだ」

そう言って智を見る。

「それでこんな素敵なお嬢さんに育ったわけだね、君も」

「・・・私の話をしてたんじゃないのに」

いちいち口説かれていたような気がしてしまう私は重症だ。

「タップの話ですよ！」

「・・・ああ」

真也は前を向きながら話し出した。

「死んだ親父がタップダンス好きでね、3歳くらいから一緒に通わされたんだよ。発表会にふたりで出たこともあった」

また、真也さんの思い出に触れることを言わせてしまった。智は

済まない気持ちで下を向く。

「またあ、そんな顔しないで、智ちゃん。タップはね、俺にとっては幸せの記憶なんだから」

ふふ、と笑って、軽くステップを踏む真似をした。

「男性の生徒が少ないんで、今回斉藤さんと二人で組むことになったんだけど。親父とやったこと思い出して、ちよつと嬉しかった」

あ、駄だ。真也は立ち止まって、智に向き直る。

「何か智ちゃんにはいつも余計なことしゃべっちゃうな。さすが力リスマ店員。人の心を開くのがうまい」

ふざけた調子で言って、じゃな、と頭をぽんと叩いて去っていく。智は慌てて後ろ姿に声をかける。

「あのっ！」

「ん？」

「発表会！絶対見に行きますから！」

智の勢いに一瞬目を丸くしたが、すぐに破顔して、大きく頷いた。
「よし。じゃあ・・・今度は、智ちゃんが俺に花束くれよ？」

ろくでなし

Juneで二次会やるから来ない？と里奈に誘われたのは、神崎ビルテナントの合同送別会の夜。近所の居酒屋での一次会が終わって、帰るつもりで駅に向かって歩き出した時だった。

「どうせそっちはブルームの人たちだけじゃん」

だいたい二次会は親しい人だけの小グループになって飲み直すが恒例になっている。

「そんなことないよ。他の人もいるし、真也さんも来るよ」

「なおさら、行きにくいよ」

部外者の私が行ったら下心が見え見えだ。それに飲み会なんてきつともてる真也の周りには女の子が群がっているに違いない。いらぬ焼きもちをやいてしまうのは嫌だった。

「真也さんの歌、聴けるかもよ」

「え？」

「二次会、いつもJuneでギター弾いて歌ってくれるんだって」
はあ。智はため息をついた。生ギターで歌。目に浮かぶようだ。
あの男は分かっている女の目を惹きつける。きっと酔っ払ったとろんとした目で、フェロモンただ漏れのどんぴしゃなラブソングなんか歌っちゃうんだろう。まんまと思惑に乗るのは悔し過ぎる。

「いいよ、だつてもう、」

「とーもちゃん、見つけた」

ぽんと肩を叩かれ振り返ると、酔ってちよつとご機嫌になった真也だ。

「行くよねえ、二次会」

満面の笑みだ。

「バーの時間のJune行ったことないでしょ。貸し切りだぜ。さあ、行こう。」

ぐいぐいと肩を押されて、Juneの外階段を昇られる。バー

の時間はビルの入り口が閉鎖されるので外から入るのだ。

「おう、いらつしやい」

マスターが微笑む。カウンターの中には順もいて大皿のおつまみを作っていた。席を見回すとフルムーンの店長木暮もいて智はほつと胸をなで下ろしたが、

「智ちゃーん」

木暮も酔ってウイスキーソーダのグラスを持ったまま智の隣に来た。

「店長、かなり回ってますね、大丈夫ですか？」

「何言ってるのよ、今日こそ白状してもらわよ、こないだの涙の花束事件」

「えっ、何ですか、木暮さん。その面白そうな話」
里奈が食いつく。

「やめてよー、もう」

智が叫ぶと、それがスイッチのようになって、今までかかっていたジャズが止み、ぼろん、とギターの音が聞こえてきた。

「真也さあん！」

ブルームの店員から声がかかる。ほとんどが若い女の子だ。真也は端の席を退かして椅子を二つ並べ、ギターを持ちながら楽譜台にある楽譜をぺらぺらめくった。観客からリクエストが飛び出す。

「真也さん、こないだのバラードやってよお」

「いきなりバラード？」

そう言いながら、真也はギターのチューニングを始めた。真也にリクエストした子はさっと彼の側に寄ると、べたべたと背後にくっついて楽譜をめくって何か話している。

「分かった。じゃあ、Never Letting goを」

マスターの指笛が響く中、ギターが始まった。そして想像通り、いや想像以上の甘い声が滑り出す。もう側にいない相手を恋しく思うセンチメンタルな歌詞に、彼の声はさらに憂いを帯びて、智は耳

をふさぎたくなるほどぐらついた。

もう二度と離さない、どこにも行かせない
いつも君のことばかりだ
君なしでは生きてはいけない

隠しきれない彼の情熱。恋をしたらどんなに激しく相手を想うの
だろう。その相手は、きつと自分ではない。自分には不相応な男だ
と知りながら、どんどん、好きになっていく。苦しい・・・苦しい
よ。

そつと彼を見ると、目があった。どうしよう、視線が外せない。
彼もそのまま智を上目遣いに見ている、気がした。彼への気持ちも
全部見透かされてしまいそうだ。

もう二度と離さない、もう二度と……

こうして見つめ合ったまま、最後はフェード・アウトだった。誰
かに気付かれただろうか。智はやっと目を伏せた。

拍手の中、真也は何もなかったかのようにギターを鳴らしながら、
「次、誰か歌って？木暮さん行く？」

と声をかけた。目があったのは、きつと気のせいだ。智は自分に
言い聞かせた。勘違いをしては、いけない。

「やあよ、音痴なの知ってるくせに。順さんは？」

おつまみのカナッペを仕上げていた順は指名されると静かに首を
振ったが、

「いいねえ、久しぶりじゃん、順とやるの。来いよ、順」

真也はちよいちよいと手招きする。

「あれやろっ、ビートルズの『ミッシェル』」

酒を出す店に勤めている順は、こんな酔っ払いをあしらうのは慣

れっこのようだった。あきらめて手を拭くとエプロンを外してカウ
ンターから出てきた。今日の彼女はタートルネックの銀のラメの入
ったロングセーターと黒の細身のジーンズで、そのシンプルさがか
えって美しい彼女を際立たせていた。

「じゃ、一曲だけ」

ひゅーひゅーと口笛が鳴り、聞き慣れたギターのイントロが響く。
小さく息を吸い込んで、順は歌い出した。

少しハスキーな声。その物憂げな目が、曲調に合っていた。ma
beileの発音が舌足らずで可愛い。そしてコーラスする真也
と見つめ合いながら、繰り返す求愛の言葉。

「愛してる」を三回、

「あなたが欲しい」が三回。

ああ、分かってしまった。少なくとも順は真也を愛している。

お似合いだ、敵わない。思わず切なくなって胸を押さえる。

曲が終わって拍手がやんでも、智は顔を上げられなかった。

「智、大丈夫？」

里奈が心配してのぞきこむ。酔ったかも、と苦笑いして帰る手段
を考える。順の好演で盛り上がる会場を後にして、そっと席を立ち
洗面所に行く。手を洗って、化粧を直した。鏡に映る自分。見にく
い嫉妬で歪んでいる。もう嫌だ。諦めなければ。これ以上深みには
まらぬうちに。

帰ろうと思ってそっと洗面所を出ると、真也が通路で通せんぼを
するように壁に寄りかかって足を投げ出していた。智を見ると身体
を起こして、

「大丈夫？青い顔して席立ったから」

と顔をのぞき込んだ。さっきまでの主役がこんなところに！誰か
に見つかったら！

「大丈夫です！真也さん、戻って下さい。私、帰りますから」

慌てて出口へ急ぐと、真也は通路を塞いだ。

「一人じゃ危ないよ、駅まで送ってく」

マスターに二人分のコートをもらうと、智の肩にコートを掛ける。自分のコートを着ながらそつと木暮や里奈に声をかけると、二人は心配そうに頷き、真也に智を託した。

何も言えず、酔って気分が悪いふりで俯いて歩く。真也も黙って歩幅を合わせていたが、突然、

「順とは、何も無いよ」

と言った。智は思わず真也を見上げた。

「決定的な拒絶はしてないけど、進展することもない。俺たち似てるんだよ、俺には父がいない、順も早いうちに母親を亡くしてる。

一緒に居ても理解はできるけど、少なくとも俺はあの子に恋愛感情はもてない。ただの幼なじみだ」

立ち止まって真也を見た。彼は分かっている。私の想いも、順さんの気持ちも。その上で冷静に言葉を選んでいるのだ。近くの公園に入ってベンチに腰掛ける。

「・・・正直に言うと、俺はね、今の時点で君を愛してはいないと思う」

智は打ちのめされて倒れそうになる。

「でもね、俺は君のことが案外気に入ってるんだよ」

智は信じられない気持ちで真也の顔を見た。私の気持ちを分かっているってそんな軽々しい言い方をするの？残酷すぎる。

「つついプライベートを喋りすぎちゃうのも、君だからだよ。ひたむきで明るくて思いやりがあつて、君は俺のつまらないこだわりを解ほぐしてくれる。もっと側にいたくなるよ」

「・・・中途半端な気持ちならいりません」

ひどい男。涙目で睨んでも効果はない。

「私は、手加減や遊びができるような女じゃない!」

「・・・ごめん、ろくでなしだな、俺」

智の涙を指でぬぐう。

「でも、ろくでなしだけど、器用じゃないんだ。嘘もつけない。だから他の子に粉かけたりはしないつもりだけど」

そんなこと聞いても、選択肢なんかほとんど残されてやしない。

最初から不利だ。だって私は・・・。さっきの真也の歌った歌詞が甦る。いつも君のことばかりだ……君なしでは生きてはいけな……。

「・・・俺と、つきあってみない?」

yes もno も言えなくて、ただ俯いて涙を流した。

そんな智の頭を自分の胸に抱き寄せて、真也はつむじに小さなキスをした。

契約成立の刻印のように。

冷たい背中

週末は智の勤めるフルムーンも大忙しだ。特に金曜の週末は明日からの休みに気もそぞろな女の子達が次々やってくる。

「あ、藤沢様。いらつしゃいませ」

藤沢真紀は最近ついたお得意様のひとりだ。何でも智の勧めたワンピースが彼女の恋の橋渡しになったとのこと。恋が叶った彼女はいつも初々しく輝いている。

「春物のワンピースも入ってますよ。この明るいイエローなんかどうでしょう？」

「綺麗な色！」

カナリア色のAラインのワンピースはシンプルだが、肩の所に付いたリボンと袖口の真珠のようなボタンで大人可愛い印象になる。

「実は来週の土曜日に、彼のご家族とお食事をする事になっていて」

恥ずかしそうにいった。

「わ、それってついに婚約とか？」

「ううん、違うの。なんかイベントがあってその帰りに最近出来たイタリアンレストランに行こうって」

「いいですねえ！」

智はにっこりと頷いた。彼女の照れくさそうな笑顔を見ると、俄然幸せのお手伝いがしたくなる。

「この服びつたりですよ！ご両親にも受けが良いと思いますし。強いていえば袖がちょっと長いですよね。お食事の時汚しやすいし、何より袖が決まると全体が締まりますから。お時間いただければ、気持ち丈を詰めましょうか。裾にボタンがついてるのでお直しは今日明日とはいかないんですけど、来週の金曜日には」

「金曜は会議を兼ねた夕食会があって遅くなるからこれないの。土曜日の午前中に来ます、食事は夕方からだから」

彼女は嬉しそうに手を振りながら去っていった。

「すごい幸せそうで、いいなあって」

智が里奈に羨ましそうに話すと、なあに言っただけだよ、と里奈は智の髪をひっぱった。今日は里奈の部屋で恒例のシュシュやバレツタのお試し会だった。

「智だって真也さんがいるじゃない」

里奈にはどうやら付き合うことになったことは言っていた。ただしきつく箝口令を敷いてある。真也のファンに知れるのも怖かったが、本当は、いつ壊れてもおかしくないと自覚している曖昧な関係だからだった。

「その後どうなの、真也さんとは」

「どうって、変わらないよ？ たまに食事したり、こないだは遊園地行った」

「そうじゃなくって。進行状況っていうんですかね？」

里奈が智を小突く。言いたいことは分かる、分かっているが。

「手を繋いだことはあるよ。あとは頭のとっぺんにキスされたことはあったかな」

「はあっ？」

里奈はすつとんきょうな声を上げた。

「あんた成人式終えたよねえ？ しかも相手はあの真也さんだよ？ 何、拒否ってるとか？」

「私は何も。なにあの真也さんがって、人聞きの悪い」

「え、知らないの？」

里奈は明らかにまずい、という顔をした。

「・・・何が？」

智の追求を逃れられたことはない。里奈は観念してため息をついた。

「いや、これは噂、あくまで噂なんだけど」

里奈は何度も念を押す。

「真也さんて引く手あまたじゃん。女避けなのかもしれないけど、ピル飲んでない女とは付き合わないんだって。しかも女が『飲んでる』って言っても、『病院の処方箋見せる』とまで言うらしいよ」

智は思わず顔をしかめた。そんな話を聞いていい気はしない。しかし一方であの彼ならそんな事もあるかな、とも思った。何も言わない智に、里奈は顔をのぞき込みながら肩を叩いた。

「智、無理はだめだよ」

里奈は真面目な顔をしていった。

「あんたがあんたじゃなくなるようなら、そんな恋は止めた方が良
いんだよ」

「でたよ、里奈の恋愛格言」

凶星をついた重い言葉をつい茶化してしまう。

「あたしは、仕事バカで前向きな智が大好きだからね。変に変わら
ないでそのまんまでいて欲しいよ」

里奈は念を押すように智の目を見た。

「ありがと、里奈」

そうだったが、まるで自信はなかった。

今までの人生を変えてしまうのもまた、恋だから。

次の週末の金曜日は朝からついていなかった。フルムーンについとたん買ったばかりのパンプスのヒールが壊れ、足をくじいた。頼んだはずの荷物が色違いで届いたり、お客様からの八つ当たりのなクレームがあったり。一日を終えた時にはくたくたになっていた。それでも明日もまた忙しい土曜日だ。ため息をつきながら痛む足首を引き図ってエレベーターでロッカルームに向かう。

5階に降りると階段の所で見慣れた黒いTシャツの後ろ姿を見つけた。そうか、今日は金曜日でタップの日だった。現金なもので彼を見ただけでそれまでの鬱屈した気持ちが晴れるような気がした。しかし声をかけようとすると、先に彼の名を呼ぶ声があった。

「ねえ、真也さあん」

しなだれかかるように女の子が彼の腕に縋る。見覚えのあるきらびやかなバレッタ。あれは確かこないだの二次会で真也にリクエストをしたブルームの店員だった。

「今度の日曜日なんだけど」

「悪いけど、用事あるから」

「じゃあ、その次の週末は」

彼女の追求は容赦がなかった。真也のため息が聞こえる。

「それなら僕もはつきり言うけど、その気はないよ」

きっぱりとした言い方にほっとしたが、一方で付き合っている人がいると言ってくれなかったのが哀しかった。バレッタの彼女は「ええ、どうしてえ」と身体を揺らしている。そのうち動きをぴたりと止めると、智がいるのが分かったのだろう、こちらを見ながら彼女はゆらりと妖艶な笑みを浮かべた。

「・・・じゃあ、一晩でもいい」

彼女は甘えた口調でそつと囁いた。嫌悪感で鳥肌が立つ。背中を向けているのでその表情はわからないが、真也が相手にするわけがない。そう信じて立ち去ろうとしたが、痛む足首のせいでスムーズに動けない。

「だったら、」

真也の低い声が響いた。

「・・・ピル、飲んでる？」

それからもう訳が分からなかった。くじいた足の痛みも忘れて走り続け、気がついたら自分の部屋にいた。

私は、何を聞いた？

彼は何を言った？

・・・結局私には抱かれる価値もない子供だったということだ。

「俺は君のことが案外気に入ってるんだよ」

「ろくでなしだけど、器用じゃないんだ。嘘もつけない。」
「他の子に粉かけたりはしないつもりだけど」

嘘つき、嘘つき、嘘つき。

同情だった？気まぐれだった？
いつまでも涙は止まらなかった。

幕切れは華やかに

翌日の土曜日は、よりによって真也のタップダンスの発表会だった。

智はそのことをすっかり忘れていて、ふとカレンダーをみて驚愕した。仕事も出勤予定になっている。しかし無様に泣き腫らした顔は何をやっても落ち着かず、店に電話し朝から欠勤にしてもらった。この職についてから初めてのずる休み、心配する同僚の声にさすがに胸が痛んだ。

真也の催促を真に受けて花束を予約してあったため、午後には何とかましになった顔に化粧を施して花屋に向かった。赤い薔薇だけの贅沢な花束は、真也のような華やかな大人の男にこそ似合うとオーダーした。頼んだものをドタキャンされるつらさは自分の仕事で身に染みている。そして、やっぱり花には罪はない。多分今までの人生の中で一番高い値段の花束を、智は予定通り買い求めた。花屋の晴れやかな顔と咲き誇る大輪の薔薇の赤が、今日の智には眩しすぎてまた涙があふれる。

会場は笠倉駅近くの公会堂で、それぞれのきらきらした衣装を纏った子供達や色鮮やかなドレスの女性達がいる中、黒いタキシードを模した衣装の真也たちはすぐ分かった。姿勢が良く背の高い二人だが、特に真也は波打つ髪をオールバックにして左耳に大ぶりのピアスをきらめかせ、匂い立つような色っぽさだ。浮き立つ子供達をなだめて、冗談を言っっては笑わせている。こんな時でもときめいてしまう自分が恨めしかった。

真也達のダンスは素晴らしかった。結局短縮してできあがったプログラムは無駄がなく見せ場が多くなっていて、特にソロの掛け合いは場内から拍手が出る程だった。曲が終わって二人がポーズを決めた時、智は心からの拍手を送った。そして花束を手に躊躇しながら舞台に近づくと、駆け寄った女性に先を越された。

「お父さん、素敵だったわ！」

そう言ってカラーや青い花が混じった洒落た花束を斉藤に渡したのは、彼の妻のようだった。彼も彼の妻も誇らしげで幸せそうで、会場からさらに大きな拍手が巻き起こる。智は自分が分不相応な気がして、思わず後ずさったが、大きな声が彼女を呼んだ。

「智！」

頬を上気させた真也が大きく智を手招きする。呼び捨てにされたのは初めてだ。

「俺に、くれるんだろ？」

そしてあの三日月みたいな笑顔。智は涙をこらえて舞台に駆け寄り花束を渡した。ピロードのように艶めく深紅の薔薇の花束は、晴れ晴れとした彼の笑顔を鮮やかに彩った。

「何だよ、また泣きそう？」

優しく微笑むと、真也は花束ごと智を抱きしめた。踊り終えたばかりの温かな身体から彼自身の甘やかな香りがして思わず身を委ねそうになる。途端場内に起こる冷やかしとどよめき。はっと我に返って回そうとした自分の腕を下ろした。智はいたたまれなくなつたが、それは羞恥のせいではなく哀しさのためだと場内の誰が気付いただろう。多分真也でさえ分からなかったに違いない。花束を身代わりにして素早く彼の腕を逃れ、振り返らずに会場を後にした。

これで、お終いだ、全て。幕切れにふさわしい華やかな演出。智はもう涙を隠さなかった。

翌日曜は初めから休みで月曜の朝からの出勤だったが、フルムーンに顔を出した智を待っていたのは、店長木暮の叱責だった。

「土曜日、何で急に休んだの！」

「すみません」

急で申し訳なかったが連絡は入れている。なんだろう、ここまで

怒られる理由が分からなかった。

「藤沢様のお直しのワンピース、お渡しする日だったでしょ！」

はっと気付いた。そうだ、土曜日に彼の家族と食事会があるからと買っていたいたワンピース。自分から袖詰めを申し出た。金曜は来られないから土曜日の午前に来ると彼女は言っていたんだ。

「こつちもあなたに聞いてさえいたら分かったんだけど、何処にあるかわからなくて。携帯は何度かけてもつながらないし。仕方なく今日お渡しすることになったのよ？」

智は震えた。もし真也からかかってきたらと、ずっと携帯は切っていたのだ。土曜日、大切な晴れの日、あの黄色いワンピースは彼女に着られることのないまま陽の当たらない暗い保管庫にしまわれていた。ああ、どうしよう。

「すみません！」

智は何度も頭を下げた。木暮は「謝るのは私にじゃないから」と言って智の顔を上げさせた。

「藤沢様は文句も言わないで帰られたのよ。今日仕事終わりで寄るっておっしゃってたからね。よく考えて、きちんと対応なさいよ」

昼休憩の時間になっても智は落ち着かなかった。とてもJuneに行く気にはなれず、サンドイッチを買って公園で食べるといった智に、一緒に休憩だった里奈は心配そうに声をかけた。

「どしたの。土曜は真也さんの発表会だったでしょ」

「・・・もういいの。真也さんのことは」

「はあ？何言ってるの？土曜日からずっと、私の携帯に真也さんから電話来てたんだよ。智に連絡がつかないって、何度も、何度も」

「もういいの！」

智は顔を伏せた。色んなことが押し寄せてきて考えられない。当座はお客様のことだ。智は頬を叩いて立ち上がった。

「申し訳ありませんでした！」

その日の夜、智の客、件のワンピースの藤沢真紀は仕事帰りのスーツでフルムーンにやってきた。智の就業時間はとうに終わっていたが、お詫びをするためずっと売り場に出て待機していた。彼女は智も何度か会ったことがある彼氏と一緒にだった。

「いいんですよ。栗山さんのことだから、何か理由があったんでしょ、もういいですってば」

真紀は微笑んで智の肩を叩いた。

「いえ！どんな理由があっても、大事な時にお約束していたワンピースが間に合わなかったのは事実です。本当になんてお詫びしたらいいか」

「・・・大事な時って。大した食事会じゃないよ。お袋と親父だけがしゃいじやって、俺たち蚊帳の外だったもんな？」

彼氏が割って入ってフォローしてくれる。

「結局、あの日の紫色のワンピース着たんだよ。あれからなかなか着てくんなかったから、俺的には全然OKだったけど？」

彼に顔をのぞき込まれ真紀は真っ赤になって俯いた。紫のワンピースは二人が恋人になるきっかけとなったワンピースで、二人共思い入れを感じてくれていた。智はその気持ちが申し訳なくて、頭を深く下げ続けた。

「じゃせっかくだから、その新しいワンピース着てみせてよ」

彼氏は真紀を促す。智は慌てて包みから直したワンピースを出し、試着室に案内した。

「ほんと照れ屋だからなあ」

真紀が試着室に入ると彼は智に向かってにやつと笑った。

「栗山さんのこと信用してるから、もっといろいろ選んでもらえて言ってるんだけど。フルムーンの服はとっておきの時に着るんだってきかないの。普段だつてどんどん着ればいいのにさ」

ありがたい言葉に胸が打たれる。そのうち真紀がおずおずと試着室から出てきた。明るいイエローは真紀の白い肌を輝かせる。襟元のリボンも鎖骨を美しく際立たせていたし、袖丈も智が計算した通

りで、ほんの少し詰めただけで服がオーダーしたようにしっくりくる。パールを模したボタンの下から覗く手首もさらにほっそりと美しく映えた。

「良くお似合いです!」

「すごくいいよ、真紀。このままJune行つてマスターに見せびらかそう」

「・・・お知り合いですか?」

Juneと聞いて胸がちくりと痛む。

「あそこの娘の順つて、俺の高校の同級生。昔からの行きつけなんだ」

順の儚げな顔とミッシェルを歌った時の面影が甦る。

彼女にも春色のワンピースを着せてみたい。そしてふんわり幸せそうに微笑んだなら、もっともつと綺麗だろう。智はふとそんなことを思った。

追いつめられて

藤原真紀と彼氏が仲良く帰って行った後、智は店長に報告を済ませロッカールームに向かった。この一件でかなり緊張していたので、へとへとになって5階にたどり着くと、ダンススタジオの前に真也が立っていた。

踵を返そうとすると、手首を捕まれる。熱い掌。見上げると視線はもっと熱かった。

「やっと捕まえた。何で逃げるの」

「離して下さい」

真也は手を離さず智の顔をのぞき込んだ。もう一方の手もそつと智の手の上に重ねて、驚くほど甘やかな眼差しで見つめられて心が揺れる。

「・・・土曜日はありがとう。ずっとお礼が言いたかったのに電話出ないし。今日食事でもと思ったんだけど」

「もう、会いません」

智はきっぱり言っ手振り払うとロッカールームに逃げた。急いで荷物を取ってくると、やはり真也はそのまま待っていた。

「会わないって、どういうこと？」

「そのまんまです」

「どうして!」

「失礼します」

追いつがる真也を振り切って階段を一気に駆け下りる。真也ももつれるように後に続いた。2階の踊り場で真也は智の肩を押さえて立ち止まらせた。

「言ってよ。何がいけない?何も言わないで別れられるなんて思っ
な!」

肩が揺さぶられる。

「別れる?私たち付き合ってたんでしたっけ?真也さんならいくら

でも代わりがいるでしょ。さつさとピルを飲んでる女の子と付き合ったら？」

階段では自分の声が思いの外響き、辛く苦しい現実が耳から戻ってもう一度智の心を激しく苛む。^{さいな}

「どうしてそんなこと？」

真也は気付かない。智は唇を噛んだ。

「・・・金曜日に5階で、話してたでしょ！」

あれか。真也は納得したように呟いた。

「話、最後まで聞いた？あんなの断る常套手段だ！あの子はうちの店員で下手に冷たくできないんだよ！」

「私にはキスひとつしないのに、店の子とは随分踏み込んだ話をするんですね！」

「それは！」

真也はぐつと黙る。認めたんだ、と智は理解した。

「・・・私は！あなたが他の人と抱き合ってるって考えただけでも胸がつぶれそう！」

智は胸に手を当てて叫んだ。

「割り切った付き合いなんて絶対出来ないし！あなたみたいな人といると振り回されて、仕事も何も出来なくなる！私は、私らしく仕事がしたいの！」

「・・・土曜日俺のせいで仕事さぼってミスしたから？」

苦々しい顔で畳み返されて、思わず固まった。

「なんでそれを」

「木暮さんが、君の様子が変だってさつき俺に連絡くれたんだよ。

俺、木暮さんには付き合ってること打ち明けてるから」

どうして、そんなこと。智の混乱は深まるばかりだ。いつものらりくらりだった真也が吠える。

「俺のために仕事すつぽかして、お客に大きな迷惑かけて。あんなに仕事が好きで君が！それだけ俺が好きなんだと思っちゃいけないのか？俺と付き合うつと君は駄目になる？君らしくいられない？」

その時足音がして、智たちの前に二人分の影が差した。

「・・・ちよつと聞き捨てならないなあ」

そう言いながら出てきたのは藤原真紀の彼氏だった。そういえばここは2階の階段、彼らはJuneに寄っていくと言っていたのだ。彼の肩越しに黄色いワンピースが見える。

「俺たちは何も迷惑被ってない。確かに土曜日には間に合わなかったけど、結果大したことじゃなかった。俺たちの付き合いは栗山さんのお陰で始まって、その後もとても良くしてもらってる。真紀がフルムーンに行くといつも笑顔になって帰ってくるんだ。それって栗山さんの人徳だろ？感謝してるんだ。俺たちはたった一回の過ちで彼女を評価したりしない。この服だってすごく良かった」

彼は真紀の肩を掴んで二人の前に押し出した。春色のワンピースを綺麗に着こなす真紀は、確かに誰も文句の付けようがない。

「社会人の基本！仕事の失敗はな、仕事で取り返せばいいんだよ！」彼は真紀を自分の背後に戻すとぐいっつと真也に近づいた。

「舞台ではあんなに熱い抱擁してたくせに、他にも手を出してんの？おまえ最低だな！」

「え？」

目を見張る真也に彼は凄んだ。

「・・・俺は、斉藤周平。あんたとタップを踊ってた斉藤信吾の息子だよ！」

さすがの真也も哑然としている。

「もつと男気があると聞いてたけどね。こないだ舞台が終わった時はつきり告白するんだって親父に話してたろ？」

真也の頬にかつと朱が差す。

「周平君！」

真紀がたしなめると、周平は彼女に大丈夫、と言うように笑いかける。

「あまりに情けなくて。これが黙っていられるか」

相手が年上でも怯^{ひる}まない。火がついた周平はずい、とさらに詰め

寄った。

「・・・知らないようだから教えてあげるよ」

まるで真剣を交わしながら見合っているような強い視線。

「相愛の相手と抱き合うのは、これ以上ない幸せだ・・・人生が変わる」

そう言った彼の顔には寸分の照れも見えない。代わりにこれ以上ないくらい赤くなつた真紀の肩を抱くと、さっと身を翻して去っていった。

残された二人は鮮やかな周平の独断場に呆然と立ち尽くしていた。次に何を言えいいのか、お互い全く分からなかった。

「・・・智」

彼が自分の名を呼ぶ。見上げると愛しそうに自分を見つめる瞳。

それだけで、心がたつぷりと満ちる。ああ無理だ。彼が例え不実でも、拒絶されない限り諦めるなんてできやしない。

「智、聞いて」

真也は手を伸ばしたが、彼女はその手をやんわりと押しとどめた。

「・・・もう少し、待って下さい」

それでも智には意地があつた。

「来週、来週の月曜日に会って、その時全て聞かせて下さい」

火曜定休の神崎ビルで、月曜は智や真也にとつての週末だ。

「一週間も待つのか？どうして！」

真也は信じられないと言ふ表情をした。

「この二日だって、俺がどんなに、」

「・・・お願いします。待って下さい」

有無を言わず繰り返す。智の意志は固かつた。真也は長いため息をつくと、

「・・・わかつた、待つ。でももうそれ以上の延期はなしな」

と言つてくれた。牙を抜かれた黒豹はしょんぼりとして、見えないうつろげさが垂れ下がっているように見える。

月曜日。

それまでに、やることがある。

智は自分を鼓舞し帰路についた。

真実の口

日曜の夜、仕事終わりに真也から、明日の夜の待ち合わせは行きつけのイタリア料理店で、というメールがあった。家庭的な料理を出す気の置けないあの店で、ちゃんと話なんかできるの？智は不審に思いながらも了解のメールを返した。トリートメントは念入りにとっときのパツクも惜しげもなく肌に使って、入浴時間はついつい長くなった。

月曜の夜、待ち合わせのレストラン *Bocca della Verità*? に着くと、真也は外で待っていて智を認めると軽く手を挙げた。シャツとジャケット、パンツにくしゅくしゅしたブーツまで全て黒づくめ。艶やかな髪をひとつにまとめていて、シュシュはボタンと淡い紫のビーズ、智とそいものものだ。真也も緊張しているようだったが、智の髪を見て「あ」と言うなり笑顔になった。智は丁寧に手入れをした髪に真也の選んだシュシュをつけている。あの時の様に少しは大人っぽく見えるだろうか、と彼の手さばきを見よう見まねで模してみた。裾と襟ぐりにクラシカルなレースのついたアイボリーのミニワンピースに、同じくアイボリーのくしゅっとしたショートブーツ。ブーツまで真也と同じテイストだった。

「綺麗だ・・・天使みたい」

囁かれて一気に身体の熱が上がる。

「入ろう。その前に」

彼はレストランの入り口をのぞき込んだ。そこには店の名前にちなんだローマ名物「真実の口」のレプリカがある。嘘をつくと手が抜けなくなる、ヘップバーンの映画で有名なあれだ。

「手を入れて」

何を言っているのか、と思って彼の顔を見上げる。ふざけるような心境じゃないのに。

「入れて」

彼の目は真剣だった。言うとおりに真実の口に手を入れたが正直な智は勿論噛まれることはなくて。すぐに手を引っ込める。

「俺も、入れるよ」

すつと真つ直ぐにその手を滑り込ませた。そして智の目をじつと見据えながら、ゆっくりと手を引く。智は悟った。彼は誓っているのだ、今日嘘は言わない、と。

「さ、行こうか」

しかしその食事の席で真也はいつも注文するワインも頼まず、核心に触れる話は一切しなかった。ただ自分を見つめ続ける視線にドキドキして味もろくに分からないまま食事を終えた後、ついに真也が重い口を開いた。

「話したいんだ・・・どうしても、ふたりきりで」

彼はこれからしかられる子供ののように弱々しかった。

「悪いけど、うちに来てくれる？」

真也の部屋は神崎ビルから歩いて5分ほどの古いマンションの一室だった。ドアを開けると真也のいつも付けているコロンが仄かに匂う。ビルオーナーの息子にしては質素な部屋だ。リビングは雑然としてはいるが汚くはない。黒いソファに木のテーブル、オーディオシステムだけが大きく幅を利かせている。CDやDVDもたくさんあって、壁には古いミュージカル映画のポスターが貼られていた。本棚には小説や経営の本などの他にたくさんのファッション誌、ヘアカタログ、棚の上にはウィッグも何体もある。寝室はもう一つの部屋だろう、ベッドは見当たらなかった。

「そこ座って」

真也は黒いソファを指して、自分はコーヒーを作るためにキッチンに立った。手際よく2杯分のコーヒーを淹れると智の脇に腰掛ける。ふうっ、と長い息をついて彼はゆっくりと話し出した。

「・・・俺さ、美容師やめてからなにやってもまとまなくてさ。一生懸命にやってもなんか空回りで。そんな時お袋に言われたんだ。どうせ何の取り柄もないんだったら、せめて見てくれに気を配って女に媚びて、徹底的に客や従業員に尽くして喜ばせろって。あのお袋なりの励ましたったんだろうけど、その言葉がずっと呪いみたいについて回って、女の子に厳しくできなかった。言い寄ってくる子にもあんな風にしか言えなくて。俺ラテックスアレルギーだから避妊できないし、いい加減な付き合いはしたくなかったんだ」

「は？」

智は真也に問うように目線を上げた。そこでなぜアレルギーの話になるのかが分からない。

「・・・だから、避妊具ってゴムだろ？俺今度アレルギー起こしたらタダじゃすまないってきつく言われてるから。使えないんだよ」

まさか、そのせいで。智はため息と共に脱力しどさつと身体をソファに預けた。

「俺がどう思われようと構わないし、そこまで思い入れのある相手じゃないからアレルギーの話はしなかった。大抵言い寄ってくるのは若い子だから、ピルの話の時点で引いちゃってそこでジエンド。相手も嫌な思いはするだろうけど、俺を『手の付けられない男のクズ』とでも罵れば丸く収まる。こないだの子も大胆なこという割には最後には怒って頬をひっぱたかれて終わったよ。さすがに男に責められたのは斉藤さんの息子が初めてだったけど」

真也は智に向き直って、じつと視線を合わせる。

「だから美容師をやめてから何年かな、それ以来俺は、」

瞳が、信じて、と瞬いた。

「・・・誰も抱いちゃいない」

ぼろり、と智の涙がこぼれ落ちる。真也は静かに微笑むと彼女の涙の筋を指で払った。

「馬鹿じゃないの」

智は涙ながらに真也を睨んだ。

「どうして自分を悪者にするの？なんでそんなに投げやりなのよ？私に無いものたくさん持つてくるくせに！」

彼の胸倉を掴むようにして智は叫んだ。

「いらぬなら私にちようだい？手も足も顔も声も、全部私にちようだいよ！」

「あげる、欲しいなら、全部」

真也は大きな両手で智の両手を取った。

「君に『愛してないけど付き合つて』って言った時、本当はすでに君を愛してた。でも俺が我慢出来なくなつて君を求めてしまうのが怖くて。君の方で準備してなければ、大事な君の一生を棒に振ることになる。正直で前向きで仕事が大好きな君を、俺のために苦しめたくなかった」

彼の瞳は潤んでいた。

「でもあの発表会で、俺のために赤い薔薇を腕一杯に抱えてきた君を見て、唐突に思ったんだ。何もかも忘れて単純に『ああ、結婚したいな』って。あの薔薇は俺の部屋にある、まだ枯れてないよ」

彼は素早く立ち上がって、もうひとつの部屋に智を案内した。そこは寝室で、そのベッドサイドの硝子の花瓶に智があげた薔薇が差してあった。赤い花弁はまだ瑞々しく、濡れたように輝いている。真也は智の両肩を掴みしっかりと目線を合わせた。

「・・・智、俺の子供を生んでくれない？君の命を俺に分けて。セックスってそういう事だろ？」

あられもない言葉とベッドに思わず赤面したが、はっと我に返ると、

「待って！」

と智は急いで居間に戻る。

「何？」

追いかけると、智は自分のバッグを開けて何やら探している。

「これ」

智は振り返ると少し誇らしげに白い袋を出し、真也の鼻先に突き出した。

その袋には、

「栗山 智様」

という名前と共に、産婦人科病院の名が書いてあった。

「・・・智！」

「準備、これでいい？」

智はいたずらっぽく笑ったが、真也は泣きそうな顔で彼女を見た。ここまでしてくれた子は今まで誰一人としていなかったのだ。

「俺の、ために？」

「私のためでもあるよ。急に産休になったら木暮さんに怒られちゃうもん」

肩をすくめた智を真也は力一杯抱きしめた。

「俺は・・・どうしたらいいんだ」

溢れ出す想いを持てあますように呟くと、智が小さな声でその答えを教えた。

「・・・キス、して？」

智の言葉に真也はぎょつとしたように彼女を見た。智が照れくさそうに微笑むと、彼は猛然と手を引っ張って寝室に戻り、いきなりベッドに智の身体を押し倒した。

視界には真也だけ。他には何も見えない。

「キスして、だ？」

真也は少し息が上がっていた。

「今までキスしなかったのは」

唸るように言つて、彼女の顔の両脇で二人の指をきつく絡めた。

「そのまま止まんなくなるからに決まってるだろ！」

重なる、熱い熱い身体。

彼の目に欲望の渦。

牙を取り戻した黒豹に狙われた智は身震いした。

唇まであと3cm。熱い吐息がかかる。

「・・・いいか？」

あと1cm。

「キス、するぞ？」

「・・・！」

返事は、出来なかった。

かけあう魔法

明けた水曜日、智が昼食をとりひとりでJuneに行くと、マスターが声をひそめるように言った。

「今日、真也君に会った？」

いきなり彼の名前が出て、出勤直前まで智を離そうとしなかった彼の力強い腕を思い出し赤面する。首をふるふると振ってマスターに向き直った。

「どうかしました？」

「朝突然ここに来てさ、すっごく浮かれてるんだよ。鼻歌なんか歌っちゃってさ。なあ、順」

サンドイッチをこしらえていた順も頷いた。

「それでランチの時に智ちゃんきたら呼んでって言われて、今連絡したんだけど・・・あ、早！」

ロングストライドで軽快に入ってきた真也は、智を認めるとろけるような笑みを浮かべて迷いもなく隣に腰掛けた。今日の彼の服は「コーディネートして」とねだられて智が見立てた。淡いピンクのペンシルストライプのシャツに細めの小さなグレイのタイ、タツプの発表会で使ったボルサリーノ型のソフト帽を少し斜めに被っていつにもまして溢れるような色気。智は見えていられなくて顔を手で覆った。

「なんだよ、顔見に来たのに」

顔から手を剥がすとそのままその手を取って目線を合わす。その幸せそうな顔。

「だから真也さん」

マスターも順さんもいるのに。とがめるように言つと、

「・・・真也」

甘い訂正が入る。月曜の夜からずっと、呼び捨てで呼ぶように言われていたけれど。

「おいおい、まさか」

マスターが二人を交互に見る。真也は智の手を取ってチャンピオンのように高く上げ、にやっと笑った。

「お察しの通りです」

「・・・お父さん、遅いわよ」

突然、今まで口を挟んだことのない順が喋ったので、皆がびっくりにして彼女を見る。順はてきぱきと手を動かしながら、

「気がつかなかったの？見てればわかるじゃない」

涼しい顔をして言い切る順に智は赤面した。そんなに観察されていたなんて。

というより、順さんは真也さんのことはいいの？戸惑う智の視線に構わず、順は顔を上げて真也の方を見た。

「ところで真ちゃん、ランチ、オーダーするの？」

「いや、いい。まだしばらく休憩入れないんだ。ちょっとこいつの顔見に来ただけだから」

悪びれずに笑みを返す真也に順は冷たく言い放つ。

「こっちは忙しいランチタイム。営業妨害なんですけど？」

「・・・言う様になったな、順」

真也は順の前にぐつと乗り出した。

「俺も面白い噂聞いたぞ。お前に懐いてる男がいるんだってな、バーナードカフェの・・・」

「な、何言ってるのよっ！」

順の慌てた顔も初めてみる。照れくさそうな笑顔は予想以上に可愛くて、智はショップ店員の血が騒ぎ始めた。

「あのっ！もしよかったら順さんうちの店に来ませんか？いつものモノトーンも好きだけど、もっと明るい色の服もきつと似合うと思う！今日入ったばかりのいいのがあるんですよ。ああっ！着せたい！ねえ順さん、今日ランチタイム終わったら来てくれませんか？」

「ええっ！」

いきなりの展開に順がしどろもどろになっていると、真也は大き

な口をほころばせて智の肩を叩いた。

「そりゃいい！順、智はこう見えてキューピッドなんだぞ？ほら、斉藤っていう、お前の同級生。あそこのカップル付き合っつけ作っただって。あやかっつけ、順」

「え、周平君のことか？ていうか、順、お前誰かいるのか？」

マスターも乗り出してきた。

「いません！」

順は大きな声で皆を制した。そして一人一人順番に向き直り、

「お父さん、今はランチタイムです！」

「ブルームの店長さん！休憩に入れないほど忙しいんでしょう？オーダーしないなら店に戻って下さい！」

とぼつさり斬り捨てた。

「で、智ちゃん、」

そう言つて順は智に向き直ると、ちよつと照れながら、

「・・・ランチタイムが終わったらフルムーンに行くわ」

と微笑んだ。その笑顔は優しく穏やかで、風に揺れる野の花のようだった。智は悟った。ああ、この人はもう辛い恋をしていないんだ。

「やったあ！」

智はランチのサンドイッチの最後の一口をコーヒーで流し込むとクーポン券をテーブルに置いた。驚いて真也も立ち上がる。

「もう、行っちゃうの？」

「だって、順さんのコーディネート考えなきゃ！」

わくわくが止まらない。店を出ても自然に足が速くなる。

「服が決まったら真也さんもヘアアクセ見繕ってあげて？美人はいじりがいあるわあ、楽しみ」

突然真也が智の手を掴んで止まった。2階の階段の踊り場、あの、場所だ。

「智」

真也はたしなめるように言ったが、視線は溶かしたチョコレート

の様につややかで甘かった。

「真也、だろ？」

お仕置きとばかりに両腕に捕らえられた。智の腰に、首に、蔦のように腕を絡めて。真也の吐息が首筋にかかって身体が震える。顔をのぞき込まれたがすぐに目を反らされた。キス、されるかと思っただのに。真也は智を見るとにやつとして、

「何、物足りない顔」

「そんなことない！」

慌てて否定するが顔の火照りが止まらない。

「ちよつと、ここではなあ・・・」

真也は週末の予定でも話すかのようにのんびりとした口調だ。

「ほら、止まなくなる質だから、俺」

「！」

「今夜も・・・うちにおいで」

耳元で囁かれて。その瞬間にぞくぞくして足元が崩れる。魔法の呪文。

「さ、解放したげる」

力の抜けた智をそつと離して面白そうに見つめる。

「仕事、だろ？」

「もう！」

智はぷりぷり怒って真也を睨んだ。しかし次の瞬間、突然背伸びをして素早く彼の頬にキスをする。

「・・・今夜の予約完了！」

やられっぱなしは性に合わない。智は弾けるように笑うとそのまま階段を駆け上がっていった。

「やりやがったな！」

真也は一人言ちると、頬を押さえた。そして三日月のように微笑むと身を翻し、一階の店に向かってしなやかに階段を下りていった。

F
i
n

かけあう魔法（後書き）

最後まで読んでいただきありがとうございました。本編はこれおしまいです。恒例の？後日談ですが、あまりに本編が甘すぎて糖度を増すのが困難に……。ということで、この後は「ずっと、冬のみまで」の真紀視点での番外編をまずupします。そちらに興味が無い方、あいすいません。その後、智と真也の番外編になります。ご感想ありましたら是非お寄せ下さい。有り難うございました。

番外編／それぞれの花束（1）（前書き）

第8話から9話を智のお得意客である真紀とその恋人周平の視点からお送りします。

番外編／それぞれの花束（１）

「お袋の発表会じゃないんだから」

周平は母親のみはるをたしなめる。

もう何度かの洗面所籠城。その度口紅の色が違ったり、洋服が違ったり。落ち着かない母に苦笑する。

今日は周平の父信吾のタップダンスの発表会だった。普段は寡黙で時代小説を好む信吾だが、小さい頃からタップを習っていてなかなかの腕前だ。周平が物心ついた時から、父のダンス発表会の日が一番いい服を着て応援に行く、と決められていた。そもそもダンスを習うのは女性や子供がほとんどで、年配の男性は肩身が狭い。それでも昨年までは同年代の同志がいたのだが、先生が腰を痛めたために教室を畳んでしまい、今年から新しいスタジオで習い始めた。そこでは現在信吾が最年長で、その下はもう30代だという。

「それでもやめないんだ」

周平が茶化すと、みはるは真面目な顔になって、

「お父さんの士気に関わるから止めて」

と言う。みはるは異常と思えるほど信吾のタップダンスに入れ込んでいる。雪が降ろうと嵐が来ようと、一人息子の周平を連れて必ず毎年発表会に足を運んでいた。

先日周平は真紀にうつかり今日の話を話してしまい、

「素敵！ねえ、私も見に行っちゃだめ？遠くからみてるだけでいいの」

とせがまれた。これにはみはるの興奮もピークとなり、真紀は斉藤家の家族席と一緒に観覧することになったのだ。

その真紀から、携帯に連絡がきた。

「ん、どうした？」

「先行ってて、ちょっとトラブルで」

確か真紀はフルムーンへ行って今日着る新しいワンピースを取りに行っていたはずだ。「ほんと感動する。ちよつと直すだけで全然印象が違うの。プロってすごいよね」と、にこにこしながら栗山さんマジックとやらを蕩々と話していたものだ。

「フルムーンには着いたの？」

「うん、だけど栗山さんが急病でいなくて。寝込んでるのかな、電話にもでないらしくて、ワンピースの保管場所が分からないっていうんだよね」

「そう、じゃ家に戻って別なの着れば。電車じゃ間に合わないといけないから今車出す。待ってて」

周平はみはるに向き直ると、

「悪い、お袋、先行ってて。俺真紀を車で送迎しなきゃならなくなつた」

「ええ？」

「必ず連れて行く。とにかく急ぐから」

俺だってお袋の気持ちはよく分かっている。キーを掴んで玄関を飛び出した。

真紀には神崎ビルの入り口で待つように行つてあつた。近くに車をつけると、真紀は素早く乗り込んだ。

「ごめんね！」

「いや、真紀のせいじゃないし」

「だつてお直しぎりぎりだったの。栗山さんに無理させちゃったかも」

「まあ、過ぎたことはしょうがない」

「だけど斉藤家の一大イベントだもん。家族席に入れてもらうんだから、私だつて頑張らないとって」

そう言つてちらりと周平を見る。今日の周平は光沢のあるグレイのスーツにごく淡いピンクのシャツ、スモーキーピンクのネクタイ。タイピンは薄墨色のガラスを細く伸ばした様な品で、中に小さな桜

が散りばめられた春らしいデザインだ。普段のスーツだってこつちが気後れするくらい素敵なのに、こんなお洒落な彼の脇にどんな服なら釣り合うというのだろう。真紀はため息をついた。

「他にないの？」

「うーん」

「じゃ、あれは？あの時の紫のワンピース」

「ええ！あれ冬物だよ？」

「いいじゃん、今日なんか肌寒いし」

真紀はうーんと唸っている。

「なかなかあれから着てくれないしさ」

もう一押し。

信号待ちで手を握った。

「見たいなあ。あの時の真紀、綺麗だったなあ」

「うっ」

「まーき」

「・・・とりあえず着てみるだけね」

yes！ 周平は心の中でガッツポーズをした。

真紀の部屋の外で待つこと数分。周平はドアをノックした。

「いいか？」

「・・・どうぞ」

今更俺たちの仲で閉め出さなくてもいいのに、という周平を軽くぶつて、真紀は顔を赤らめる。周平は彼女の両肩を掴んで少し離れて全身を眺めた。

そこに、あの日の真紀がいた。スクエアカットの襟ぐりに映える白い肌。身体にそったシルエットは細い腰のくびれや身体のなだらかな膨らみを強調して匂い立つような女らしさだ。戸惑うような瞳も赤く染まった頬も、あの頃のまま初々しい。もうその中身だって知っているのに、まだ自分の恋人だなんて信じられない。

「・・・感無量」

周平は時間を忘れて眺めていた。

「周平君、せっかくだけどこれじゃ冬っぽいし」

真紀はおずおず否定的な言葉を出す。周平は首を振って却下した。

「いや、絶対これ」

「あのもらったネックレス、素敵だし合うけど雪の結晶だし」

その言葉ににやりとして周平はジャケットの内ポケットから袋を出した。見覚えのある青い袋に銀色のリボン。

「ほんとは今日付き合ってもらったお礼に渡そうと思ってただけど」

真紀は促されるまま袋を開けた。

「春の新作」

黒いベルベットの袋から出てきたのは、つるんとした大きなビーズのようなヘッドのついた黒い革紐のチョーカーネックレス。透明なガラス玉の中、揺れるようにいくつか浮かぶ桜の花。花びらや金箔も散っていて、まるで土手の桜が舞い散り浮かぶ川の流れのようだ。周平はそれを手にとり真紀の後ろに回って付けてやる。前に回って、その出来映えに満足して何度も頷いた。

「似合うよ。おまけに俺のタイプピンとお揃い。花筏はないかたっていうシリーズなんだって」

彼は得意げにタイプピンをみせる。真紀の顔が途端にぱあっと華やいだ。

「それ、素敵だなんて思ってたの。お揃いなんて、恥ずかしいけど・・・嬉しい。どうもありがとう」

「どういたしまして。相変わらず安物だけだね」

真紀が合わせた薄い桜色のショールを手にとると、周平がふわつと広げて真紀の肩にかけ、そのまま後ろから抱きしめた。回した手で真紀の顎を後ろにしゃくって柔らかく口づける。軽く何度かついはまれて、唇が離れても真紀はしばらくうつとりと抱きしめられたままでいたが、周平の顔を見上げ突然叫んだ。

「口紅！」

みはるに見つかることに敏感になっている真紀がおかしい。周平

は唇をきゅっと親指で拭くと

「さあ、行こうか」

と車の鍵を鳴らした。

番外編／それぞれの花束（２）

会場では今や遅しとみはるが背伸びして待っていた。

「よかった、間に合って！真紀ちゃん、今日はありがとう」

「すみません、家族席にいられていただいた上に遅くなりまして」
申し訳なさ過ぎて深々と礼をする。

「いいのよ！もう、家族みたいなもんじゃない！そのワンピース似合ってるわよ！ねえ！座って、座って！」

いつも以上にテンションが高い。真紀は周平とみはるの間に座られ、飴だの飲み物だのを膝の上に小山の様に盛られた。あの純日本風のお父さんがどんな風に踊るんだろう。真紀もみはるに感化されだんだんワクワクしてきた。

「次よ」

みはるが言って、終わったらすぐ持つていけるように座席の下から大きな花束を出した。白いカラーに青いベラドンナ、白と紫のストック。大人の男性に似合いそうな色合いだ。

「・・・素敵」

「喜んでもらえるかしら」

まるで告白する女学生のようなみはるの恥じらいに、思わず笑みがこぼれる。

「勿論です！」

その途端照明が落ちて、演目の紹介が始まった。

「当ダンススタジオきつてのダンディな男性ペアの登場です。大人の魅力をご堪能下さい。斉藤信吾と神崎真也、曲は『My Favorite Things』」

舞台の中央にスポットライトが当たり、二人の男性が帽子で顔を隠して立っているのが見える。

「ああいうのってさ、帽子とったらがつくり、ってよくあるよね」

後ろの座席の悪意のある囁きに、みはるが振り向く。

「黙って見てらっしゃい！」

囁いた女の子はびくっとして縮こまる。その時ピアノのイントロが始まった。

顔を隠したまま、タップシューズがリズムを奏で始める。抑え気味のステップが前奏の盛り上がりと共に大きく鳴り響く。コルトレーンのサックスの音と共に、二人の両腕が広げられた。

「！」

会場が一瞬静まりかえる。白髪交じりの髪を小粋に固めた信吾は、フレッド・アステアばりの優雅さ。大人の風格と思いがけないスタイルの良さに目を見張った。その隣の30代くらいの男がまた凄まじい色気を放っていて圧倒される。しなやかな身体のラインにぴたっと沿う黒いスーツ、大ぶりのきらめくピアス、ごつい指輪を嵌めた指もどこかセクシーで。信吾と対照的なダイナミックなダンススタイルも帽子の被り方も洗練されて本物のダンサーのようだ。隣を見るとみはるは頬を上気させて両手を祈るように重ねて唇に当てていた。夢中になる気持ちが分かる。普段は朴訥としたお父さんなのに、見事な変貌ぶりだ。周平を見ると彼もまた嬉しそうに両親を見比べていた。最後のステップが終わると、会場は割れんばかりの喝采に包まれる。その途端拍手をしながらみはるが立ち上がった。

「ほら行って！」

周平が言つとみはるは大きく頷いて駆け出した。花束がばさばさと音を立てる。

「お父さん！素敵だったわ！」

みはるの声はよく通った。信吾もにっこり微笑み、花束を受け取る。

「ありがとう・・・みはるさん」

わあ、名前で呼んでるんだ。二人の愛情の深さに思わず心が温かくなる。会場からも拍手が巻き起こった。その時、あまりの会場の熱気に躊躇ったのか、みはるの後ろに立つ女性がじりじりと後ずさ

った。手には零れんばかりの大輪の赤い薔薇たち。そんな、もったいない、と真紀がはらはらしてみていると、

「智！」

と大きな声がした。舞台の上の信吾のパートナーだった。黒豹のようにしなやかな身体を乗り出して、大きく手招きをしている。

「俺に、くれるんだろ？」

さつき後ろで悪口を言っていた女の子が「きゃー！」と歓声を上げた。それくらい彼の仕草もその言い方も、こっちが照れる程スマートで、熱っぽくて。相手の女の子をどれだけ愛しいかが伝わって来るようだった。智と呼ばれた女性はミルクティー色の髪を揺らして彼に花束を渡す。あれ、ちょっとフルムーンの栗山さんに似てるかな。でもそうか、彼女は風邪で寝込んでるんだった。そんなことを思っていると、舞台上の彼は、何かを彼女に囁くと躊躇いも無く花束ごとぎゅっと彼女を抱きしめた。突然のことで頭が追いつかなかったのか、彼女の両手は脇に下がったままだ。しかし彼はじっと目を閉じ、抱きしめる腕を強くする。

場内は騒然。映画のワンシーンさながらの甘い光景に、冷やかしの指笛や歓声上がる。いたたまれなくなったのか、抱きしめられた女性は彼の手を振り切って足早に会場から去っていった。

「すごい」

真っ赤になって呟くと、

「真紀もああいうの好き？」

と周平に囁かれる。きょとんとして振り向くと周平は小さくではあるが両腕を広げて指先をくいくいと曲げ、真紀を誘っている。

「・・・馬鹿！」

真紀は周平の腕を叩いた。

「真紀ちゃんまで付き合わせちゃって悪かったね」

と信吾がねぎらう。ここは浅葱町に最近出来たイタリア料理店。酒の弱い周平が車を出した。笠倉にあるBocca della Verità? というレストランの2号店で、さらに洗練された創作料理が女性に人気なのだそうだ。名物マダムが料理教室まで開いており、いつも主婦を中心に予約が一杯だという。

一番いい服を着て発表会を見た後はみんなで食事というのもおきまりのコースらしく、花束を家に置きに行きがてら、信吾も着替えてスーツ姿になっていた。いかにも仕立ての良さそうなジャケットに興味のいいネクタイ、ダンスで培われた姿勢の良さと物腰がさらに彼の男つぷりを上げている。こんな齊藤家の大事な日に、一緒にひとつのテーブルを囲む事なんだか烏滸おこがましいようで、さつきから真紀は恐縮しっぱなしだった。

「すみません、私こそ、家族団らんに割り込んだみたいで」

「お祝い事はたくさんの方が嬉しいわ」
みはるがにつこり微笑む。

「大体俺だつて邪魔者なくらいなんだぜ？真紀がいて良かったよ。ほんとにこの二人はタップが絡むと・・・」

周平は苦笑する。

「でもお母様が夢中になるのも分かります！もううつとりでした。ほんとにダンディで」

信吾はふふ、と笑って、

「パートナーのせいで5割増し位に見えたんじゃないの？」

と謙遜する。真紀より先にみはるが、そんなことない！と力説するのが微笑ましい。

「ま、でも確かに、あの真也さんて人もかつこよかったわよね。」

タップもうまかったしね」

「そう、ものすごく色っぽくて・・・と」

周平が睨むので真紀は口を閉ざしたが、みはるは構わず、

「薔薇持ってきた女の子とのあの抱擁はすごかったわあ」

「と思い出しながらうつとりとため息をついた。お母さんもなかなかの注目度でしたよ、と真紀は思ったが口には出さなかった。

「あの女の子ね」

信吾は頷いた。

「こないだ練習見に来てたんだよね。俺が『恋人？』って聞いたらすごい勢いで『違います！』って否定してんだよ。真也君が本気で残念そうにしてて、おかしかった」

「ええっ！あんなハンサムを手玉にとるなんて！」

みはるが叫ぶと、周平は小さく首を振って、

「いや、鈍感なだけなんじゃない？俺も覚えがありすぎて・・・」
ちらつと真紀を見るが、彼女は案の定きょんとしている。

「ああ見えて真也君真面目だからね。好きだけどどうやら告白出来てないらしくて。今日花束のことだからかってたら、『俺今度ちゃんと話します』って宣言してたよ」

「へえ、百戦錬磨みたいに見えて案外純情なのかもね！」

みはるが乗り出す。

「また進展した情報あつたら教えて！」

「そう言うの好きだよね、みはるさんは」

慣れた調子で信吾が微笑むと、テーブルの上の黄色いフリージアも揺れた。

番外編／それぞれの花束（3）

「今日、バーナードカフェ行かない？」

明けた月曜日の帰り道、周平が誘うと珍しく真紀が断った。

「ごめん。例のワンピース今日取りに行こうかな、って」

「ああ」

土曜日着られなかった服の事だ。しかしもうイベントも終わったし、仕事終わりで結構時間も遅い。二人の恋が成就した後は、ラテを飲んだ帰りに真紀の家に寄ることも多くなった。疲れた身体をラテと真紀で癒そうと思っていた周平は不満たらたらだ。

「何も今日じゃなくなたって」

「だって今日取りに行くって言っちゃったもん」

「どこへ着てくのさ」

「それは・・・当てはないけど」

拗ねたような顔をする。

「じゃ、俺も行く、帰り道だし。どうせ今日Juneに寄ろうと思ってたんだ。ほら、良介と美砂の結婚式の二次会、Juneでやるかもしれないんで順と相談してるんだよ」

「ええっ、一緒にフルムーン行くの？」

「当てがないんなら、俺に、着て見せてよ」

周平はにやつと笑って真紀の肩を押した。

フルムーンに行くと、栗山智はすぐ真紀を見つけ、平身低頭で謝り続けた。

「申し訳ありませんでした！」

周平的にはむしろ結果オーライだったのだが。企画部で培った話術で軽口を叩いても、固い表情は変わらない。しかし、説き伏せられて着替えた真紀が黄色いワンピース姿で試着室から出てくると、智の態度ががらりと変わった。前や後ろに回って丈や皺などを確認

して、もう一度正面に回り込む。真紀の肩に触れて鏡に押し出すとほうつと息を吐いた。

「・・・良くお似合いです!」

本当によく似合っていた。確かに紫の服もいいが、明るいカナリア色は軽やかさもあって顔の映りもいい。あの発表会の日レストランのテーブルで揺れていたフリージアの様に、慎ましかだが凛とした美しさだ。

「すごくいいよ、真紀。このままJune行つてマスターに見せびらかそう」

周平は嬉しくなつて真紀の着ていたスーツを紙袋に入れてもらうよう智に頼んだ。タイミングもあるんだろうけど、本当にいい仕事をしてくれる、俺たちにとっては幸運の女神みたいな子だ。まだ気にしているのか今ひとつ浮かない顔に戻った智の顔を見ながら、周平は微笑んでいた。

夜のJuneはバー時間で本来は外階段から行き来するが、周平は勝手知つたるいつもの入口をトントんとノックする。すると閉まっていたドアがうつすら開いてマスターが顔を出した。

「お、周平くん。あれ、真紀ちゃんも。綺麗だね、その服。いいねえ、若い子が明るい色着てるのは」

マスターは周平がふる前にほめてくれた。真紀は照れ隠しについて口数が多くなる。

「今その店で取つてきたばかりなんです。その店員さんがすごくいい人で」

と思わず訊かれもしないのに話してしまう。

「どこだろ」

「3階のフルムーンてお店なんですけど。栗山さんという方で」

真紀がいうと、

「ああ、智ちゃんね。あの子は仕事好きだからね」

マスターは頷いた。

「智ちゃん」

何か聞いたことある、と思い返す。

「・・・ああ！」

「どした？」

「あの発表会の時の薔薇の花束！あれやつぱり栗山さんじゃない？」

「何？」

そう言いながら周平も思い当たる。あの時真也とか言う信吾のパートナーは「智」と呼んでいた。

「だけど栗山さん、それならあの時サボりつてことになるよ？」

あんな熱心な子がそんなことするだろうか？

「でも、あのダンス見るためならサボるかも。好きな人だったら尚更！」

真紀は夢見がちに言う。一刻も早くワンピースが欲しいと言ってたくせに。

その時、階段の方からばたばたと大きな音がした。もつれるような足音に周平は階段に急いだ。真紀も後に続く。

「言つてよ。何がいけない？何も言わないで別れられるなんて思うな！」

男の怒号が響く。別れ話か。関わり合いにならない方がいいな。

周平が踵を返そうとした時、相手の女性の高い声が応えた。

「別れる？私たち付き合ってたんでしたっけ？真也さんならいくらでも代わりがいるでしょ。さっさとピルを飲んでる女の子と付き合ったら？」

聞き覚えのある声と、真也、と言う名前に反応して立ち止まる。

隠れて陰から覗けば、やはり、発表会で信吾のパートナーだった真也とフルムーンの栗山智だ。どうした？親父は真也が告白するとか言つてたのに？しかもその話す内容がひどく生々しい。真紀は顔をしかめていた。

「私にはキスひとつしないのに、店の子とは随分踏み込んだ話をす

るんですね！」

「それは！」

どうも真也の分が悪いようだ。智は荒い息をついて言葉を継ぐ。

「・・・私は！あなたが他の人と抱き合ってるって考えただけでも胸がつぶれそう！割り切った付き合いなんて絶対出来ないし！あなたみたいな人という振り回されて、仕事も何も出来なくなる！私は、私らしく仕事がしたいの！」

仕事熱心な智らしい台詞だった。女の子にこんな事を言わせるなんて。ちよつと見てくれがいいと女はすぐ騙される。真紀と母みはるの浮き立った会話を思い出して周平はむかむかした。

「・・・土曜日俺のせいで仕事さぼってミスしたから？」

真紀のワンピースのことか。背中の後ろで真紀がぴくりとしたのが分かる。

「俺のために仕事すっぱかして、お客に大きな迷惑かけて。あんなに仕事が好きで君が！それだけ俺が好きなんだと思っちゃいけないのか？俺と付き合い合つと君は駄目になる？君らしくいられない？」

自分で浮気をしておいて、それでも彼女を繋ぎ止めようと必死だ。虫が良すぎるだろ。自分ならなんとかなると思ってるのだ、思い上がりも甚だしい。もう黙ってはいられなかった。

「・・・ちよつと聞き捨てならないなあ」

二人の前に立ちふさがった周平に、真紀は息を呑む。普段冷静な彼だが実は曲がったことが嫌いで一度スイッチが入ると手が付けられなくなる、と真紀は本人から聞いていたが、まさか今ここでそれが披露されるとは夢にも思わなかった。

「俺たちは何も迷惑被ってない。俺たちの付き合いは栗山さんのお陰で始まって、その後もとても良くしてもらってる。真紀がフルムーンに行くといつも笑顔になって帰ってくるんだ。それって栗山さんの人徳だろ？感謝してるんだ。俺たちはたった一回の過ちで彼女を評価したりしない。この服だつてすごく良かった」

今度は彼の前に押し出され、真紀は気後れしながら二人の前に立

った。智は気まずそうな顔をしているし、真也に至っては狐に摘まれたような表情だ。しかし周平の暴走は止められない。

「社会人の基本！仕事の失敗はな、仕事で取り返せばいいんだよ！」彼は真紀を自分の背後に戻すとぐいっと真也に近づいた。

「舞台ではあんなに熱い抱擁してたくせに、他にも手を出してんの？おまえ最低だな！」

知らないだろうから、言ってやる。

「俺は、斉藤周平。あんたとタップを踊ってた斉藤信吾の息子だよ！」

歌舞伎の大見得みたいだった。ふたりとも啞然としている。

「もつと男気があると聞いてたけどね。こないだ舞台が終わった時はつきり告白するんだって親父に話してたろ？」

真也の頬にかつと朱が差す。真紀は慌てた。それは駄目だ！そんな大事なこと、他人が言う権利は無い！

「周平君！」

「あまりに情けなくて、これが黙っていられるか」

相手が年上でも怯まない。火がついた周平はずい、とさらに詰め寄った。

「・・・知らないようだから教えてあげるよ。相愛の相手と抱き合うのは、これ以上ない幸せだ・・・人生が変わる」

その意味を噛みしめて真紀はかあつと赤くなつたが、周平はこれ以上ないくらい真剣だった。真紀の肩を抱くとさつと身を翻して階段を下りた。

「周平君！」

彼は真紀を見なかった。

「周平君！」

もう一度呼びかけると、

「・・・ごめん」

周平は階段の途中で止まり、真紀を抱きしめた。

「でも許せなかった、あんないい子を」

「彼の言い分も訊かないで決めつけるなんて。いつも公平な周平君がどうしちゃったの？ 当人同士の問題じゃない」

「庇うのか！ あの男を？」

周平は信じられないと言った表情で真紀を見た。

「違うよ。でも・・・何か理由があるかもしれないでしょ」

「全く、真紀もそうか？ 顔がよきや何でも許されるんだな」

「・・・そんな。何でそんな言い方するの」

今日の周平は手が付けられない。いらだち紛れに携帯を開き、ボタンを押す。

「あ、お袋？ 今日帰らないから。うん、そのまま会社行く」

電話を畳むと、真紀の手を引いて駅に向かった。

「何処行くの」

「今日は真紀んち、泊めて」

熱い眼差しが真紀を射る。

週末でも無いのに。

それでも嫌と言える訳がなかった。

番外編／それぞれの花束（４）

いつだって、キスする瞬間は緊張する。

何度交わしても、どうしてこの感触を忘れてしまうのだろう。

忘れるから、また求めるのか。

ふたりの体温が解け合うまでになっではじめて思い出す。

ああ、これが彼とのキスだ、と。

「周平君」

真紀はやつと長く息を吐く。

「ごめんな」

玄関で、電気も付けず、靴も脱がずに。

カーテン越しに真紀の部屋に差し込むのは街灯の光と月明かりだけ。

何とか纏れるようにして部屋に入り、周平は後ろから抱えた真紀ごとベッドに腰を下ろした。

「あの、ワンピース、皺になるから、着替えていい？」

真紀は遠慮がちに言う。

「それは、お誘い？」

周平がそう鎌を掛ければ、普段なら赤い顔をしてぶたれるのが常だったが、

「・・・周平君が、そうしたいなら」

消え入りそうな声が返ってきた。緊張して強ばる肩。

「ははっ」

周平は、自分を労る彼女の気持ちに気付いて、自虐的に笑った。

「ごめん。気を遣わせて」

周平は真紀を解放すると立ち上がって電気を付けた。

「気を遣ってなんか。ただこんな事、珍しいから」

「・・・ちよっと、妬いてた」

「え？」

「・・・真紀が『ものすごく色っぽい』とかいうから」

真也のことだ。思いも寄らない変化球に真紀は面食らった。

「まさか、そんな」

「妬くよ、俺だって。真紀はあんまり・・・言ってくれないから」

周平は真紀の元に跪いて、視線を同じ高さにした。揺れる、眼差し。

「君の性格もわかってるつもりだけど。それでも自信がないんだ」
初めてこの部屋に彼が来た時のことが甦る。あの時も彼は自分への気持ちを訊きたがった。会社ではいつも毅然として、弱気なところなぞおくびにも出さないのに。照れくさいけど、彼が望むなら差し出したい。真紀は勇気を振り絞った。

「・・・愛してる。私はいつだって、あなたのことばかりなんだよ？」

言い切って初めて下を向く。首まで真っ赤になった真紀を、周平は無くした宝物が見つかった子供のようなきらきらした目で見つめた。

「ありがと、俺もだ」

想いを込めて抱きしめれば真紀から漏れる吐息は甘い。たちまち身体に火が点く。簡単に燃え上がる自分に周平は困惑した。

「ほんとに、どこまで夢中にさせれば気が済むんだか」

見上げる真紀に軽くキスを返して、

「・・・ハンガー持ってきて。その時間だけはあげる」

「？」

戸惑いながら、素直な真紀はハンガーを持ってくる。

「ワンピース、皺になるの嫌なんだろう？」

周平の笑みと同時に、また部屋の灯りが落とされた。

次の週の水曜日、Juneに用事があるという周平を説き伏せて、仕事帰りに焼菓子の箱を持ってフルムーンに行った。周平はまだ納

得はいかないものの、さすがに言い過ぎたとは思っているようだ。そして真紀の言葉。

「お父さんが『ああ見えて真面目』っておっしゃったじゃない。あれだけ一緒に練習してるお父さんがよ。大分遅くはなったけど、謝つとした方がいいよ。私もお店に行きにくいし」

親父は確かに見る目はある、と周平も思う。二人に免じて謝る決心を固めたのだ。

「藤沢様」

店に行くと思はちようど帰る時間だったらしく、バッグを下げて真紀の元へ飛んできた。

「ワンピース、何か不備でも？」

「いえ、彼がこないだ勝手に大騒ぎして、謝りたいと」
「え！」

途端に智は真っ赤になった。

「あ、あれはあの、こちらこそお見苦しい所を」

「第三者が首を突っ込んで、申し訳ありませんでした。あの後大丈夫でした？」

深く礼をする周平に智は恐縮する。

「あ、あの大丈夫ってどうか」

しどろもどろになる。

「・・・う、上手くいったってどうか」

「ええっ、本当に？」

真紀の声が弾けた。

「誤解だったんです。彼、他の子とは何もなくて」

智も自然と笑みになる。周平だけが怪訝そうな顔で、

「ほんとに？浮気してなかったの？」

としつこく迫る。

「ほんとですよ！あ、彼が来た！」

天敵の来襲に周平はぎょっと身構えた。階段から真也が顔を出す。

ピンクのシャツに細身のタイ、ブラックジーンズにスタツズのついたエンジニアブーツ。そしてあのソフト帽を斜めに被って。あろう事か、手にはサーモンピンクの百合咲きのチューリップの花束まで。春爛漫の伊達男の登場だ。

「お待たせ、ってあれ？」

真紀と周平を見て歩みを止める。

「・・・先日はすみませんでした」

真紀の手前、周平は頭を下げる。内心、本当に大丈夫なのか、ちやらちやらしやがって、と思っていたのが顔に出たのかもしれない。真也は愉快そうに大きな口を開いて笑った。

「こちらこそ。骨のある彼氏でいいねえ？」

と真紀に向けて声を掛ける。さすがにぐらつくことはないけど、まさに匂い立つような男ぶり。こないだよりさらに色気が増したような？彼はにっこりして周平に歩み寄る。

「斉藤く〜ん、俺ね」

真也は周平の耳元で囁いた。

「・・・人生、変わっちゃったよ」

「！」

びつくりして真也を見ると、ウィンクにサムズアップまでしている。これには周平も思わず吹き出してしまった。まいった。すぐに蟠わだかまりが解ける。

「そうですか！それは何より。いいこと教えましょうか、あれね、父の受け売りなんですよ」

「ほほう！」

「俺が高校入学した時に、部屋に来て『男の話だ』って言って、蕩々と」

「それで君みたいなザ・大和魂みたいな息子が出来る訳ね。さすがだわ、斉藤さん」

「また父を宜しく願います」

周平は頭を下げた。

「こちらこそ！斉藤さんには色々教えてもらわなきゃあ」

そう言った後、真也は笑顔で智に花を差し出した。

「さ、帰ろ、お姫様」

それを受け取る智のまたなんと可愛らしいこと。

「じゃ、またね」

二人にあいさつすると、智の肩を押してさりげなくエスコート。階段に消えてゆく間際、頬にキスを掠めて。

「うわあ」

真紀の呟きが聞こえる。

「やられたね」

周平も肩をすくめたが、真紀に向かって手を差し出す。

「負けちゃいけない」

「何言ってるの」

そう言いながらも、彼の手に自分の手を滑り込ませた。

「さあて、Juneに行くの忘れないようにしなきゃな」

二人は手を繋いだまま階段を駆け下りる。

周平はふと、真紀ならどんな花束が似合うだろう、と思いを馳せた。ふと白いドレス姿が浮かんで苦笑する。当てられたかな、あの二人や、良介達に。

真紀はそんな周平の想いも知らず、白い花束のように微笑んだ。

F i n

番外編／それぞれの花束（4）（後書き）

これで「それぞれの花束」は終わります。この後、智と真也のあの月曜日の話が続きます。かなり甘めです。よろしかったら、お付き合いです。

番外編く解けない魔法（1）（前書き）

本編10話と11話の間の話、あの月曜の夜、正確には火曜日になってからのお話です。この番外編で二人は真也の部屋から一步も出ません。という訳で（？）超極甘仕様につき苦手な方はお避け下さい。すみません。

番外編く解けない魔法（1）

温かい。

ベッドで身じろいだ智がまず最初に感じたのは、異常なくらい温かいということ。

そして、自分のベッドと違う匂い。深い森の中で獣に捕らわれたみたいな、ワイルドでスパイスの効いたノート。そして耳に感じる鼓動。

鼓動！？

智が薄闇の中で目を開ければ目の前は彼の胸で。自分の身体は腕の中にすっぽりと包まれている。フレグランスだけじゃない、彼自身の甘い香り。そっと目を上げたら。

「・・・起きた？」

何たることか彼はすでに目を覚ましていて、微笑みながらじっと智を見ていた。その蜜のような濃さ。こっちが恥ずかしさで溶けてしまいそうな視線。

「ん？どうした？」

額にキス。照れて顔を伏せても、彼の胸の中。どうしようもない。

「今、何時ですか？」

照れ隠しに聞くと、

「まだ、1時回ったとこ。このままもちよつと寝る？それとも一緒に風呂入る？」

「！」

何なの、その選択肢。何もかも慣れなくて、智は思わず真也に背を向ける。

「智？」

それならそれで、後ろから抱きしめられて。智は嫌々をするように身をねじった。

「どうしたの」

「・・・帰ります」

思わず呟いた言葉に、真也はえっ、と言って、智を向き直らせた。
「なんで？」

「耐えられません」

「俺何かした？」

「もう、何なんでしょう、何もかも、ほんとにどうしたらいいのか」
何となく言っていることがわかったのか、真也はくすくすと笑って智の髪を梳いた。

「びつくりした。嫌われたのかと思ったよ」

「そんなわけではないです」

「いや、俺、もう突然解き放たれたから。ちょっと、というか大分
余裕なかったでしょ。結構無理させたかな、と」

かあつと身体が熱くなる。

「もう！そういうこと言わないでください！」

「何で？今夜は、そういう夜でしょう」

ふふん、と笑って真也は智を抱きしめると毛布ごと持ち上げた。

「え、何！」

「もう目覚めちゃったでしょ。お風呂入ろ。沸かしてあるから」

「歩けますから！」

「ほんとに？」

真也はそつと智を下ろした。途端にかくん、と折れる膝。落ちる
毛布を慌てて胸にかき抱く。うっ、と唸って彼を見上げた。

「ね？」

無邪気に笑って、また持ち上げられる。諦めて彼の首に腕を回す
と、真也は満足げにのどを鳴らした。

「お痒いところはございませんか、姫」

忘れていた。この人は元美容師だったのだ。始めは羞恥で身を固
くしていたバスタイムも、こんな気持ちよく髪を洗われたら、一溜

まりもなかった。

「うう、気持ちいい」

トリートメントを待つ時間に、香りのいいオイルで指先までマッサージしてくれる。一通りのコースを済ませると、ではごゆっくり、と真也は浴室から出て行く。あれ、彼は入らないのかな？と思ったら、今度は花の形の小さなキャンドルを何個も持って現れた。ぽちゃん、ぽちゃんと浴槽に投げると、ピンクの花が綺麗に浮かぶ。

「ほら、うちの店『ブルーム』でしょ。名前にちなんで花のキャンドルをプレゼントしたことがあって。その残り」

彼は突然お湯に浸かった智の後ろに自分の身体を器用に滑り込ませた。

「え、何」

「・・・動くと、危ないよ」

彼はジッポーのライターで花に次々と火を点してゆく。水面が揺れると炎が消えてしまう。謀られた！智はおとなく真也に抱かれているしかない。アロマキャンドルらしく、甘い桃のような香りが漂う。ライターを濡れないところに放ると、真也は智の肩に顎を乗せて呟いた。

「はあ、先週は地獄だった」

「どうして」

「俺、もう君が薔薇持って駆けてきた時点でやられてたからね。その後ずっと会いたくて仕方なくて、2日間電話かけまくったのに通じなくて。店長の権限振りかざして里奈ちゃんにまで連絡してさ。結局駄目だったから、月曜も速攻で仕事終わらせて待ち伏せしてたのに、斉藤さんの息子には怒られるは、智にも来週まで待て、とか言われるし」

「だって、まだ信用できなかったんだもん」

「ま、その種を蒔いたのは俺か」

真也はふっとため息をついた。

「そう言えば里奈ちゃんにもよくお礼言っというて。心配させちゃっ

たみたいだからさ」

「・・・そうでした」

先週も一緒に新しくできたお洒落なカフェやジュエリーショップに行ったのに、今日のことと頭が一杯で上の空になっていて何度も怒られた。今度埋め合わせをしなくっちゃ。

「思えば、里奈ちゃんに刷り込まれた感じだよなあ」

「刷り込み？」

「智が仕事バカだけど素直で可愛いとか、前向きの割に涙もろいか。随分噂だけは聞いててさ」

里奈つては何処まで話してるんだろう。恥ずかしすぎる。

「それですつごく興味が沸いてさ。覚えてる？初めてあった日」

忘れられるはずがない。智は頷く。

「あの日、智が来るって聞いて楽しみにしてたのに、里奈ちゃんが熱出したじゃん。ああ、これでせつかくの機会がなくなる、と思つてさ」

真也はにやつと微笑んだ。

「熱で朦朧としてるのをいいことに、『断るな、俺が相手するから』ってメモ書かせて。『早退したってメールするな』って言って帰らせたんだよ。結構大人げないだろ、俺」

「ええ！」

「だまされた智の可愛かったこと！きよときよとしちゃつてさ。警戒しまくりだったのが、シュシュ付けたげたらもう別人みたいに尊敬の眼差しで。あの時には俺、もう相当やられてたな」

ははっ、と大きく声を上げたのでお湯が揺れてキャンドルの炎もと吹き消してゆく。全て終わると、甘い香りが残るバスタブに智ごとゆっくり肩まで浸かった。

「これで、多少暴れても大丈夫だけど？」

「だからそういうこと言うのは止めてくださ」

最後まで言い終わらぬうちに唇が塞がれる。

「ふふ、智って恥ずかしがると敬語になるのな、面白い」
「真也さん！」

そう言つと、真也は突然眉をひそめる。

「その呼び方は頂けない。店の子に呼ばれてるみたいで」
「店長って呼ぶなつて真也さんが決めたんでしょ」

他になんて呼べばいいの？智が見上げると、

「・・・真也、で」

そう言つて、練習の一環の様にキスをする。

「ほら、呼んで」

「・・・無理です」

「出た、敬語」

首筋にキス。

「今度はどこにしよう？」

呼ぶまで止めない気だ。

「あの」

肩にキス。

「真也さん」

鎖骨の上にキス。

「本当は襲われたいわけ？」

「そんな事無いです！」

「なら、言つて」

智は上目遣いで真也を見たが、彼はほら、と言つて笑うだけ。仕方なく、囁くような声で、

「・・・真也」

と言つたが、バスルームでは思いの外反響して耳に届く。

「うわ、想像以上の威力」

真也は満面の笑みになる。

「真也・・・も、いつの間にか私のこと呼び捨てで。あの花束渡す時、いきなり大きな声で呼ばれて、身体が震えちゃった」

真也も照れたように苦笑いする。

「あの時『やられた』って言ったでしょ。あの時点からもう、とても『ちゃん付け』なんて出来なかった」

真也はざばつと智ごと浴槽を出ると、バスタオルで智をくるんだ。
「駄目だ、のぼせる。出よう」

番外編く解けない魔法(2)

お風呂から上がると、とりあえず彼のパジャマの上だけ、というこの上もない定番の格好をさせられて。ソファに座る彼の足の間にすっぽり抱え込まれて髪を乾かしてもらう。大きな手がぱらぱらと髪を散らしながら地肌を滑る。ドライヤーの音の切れ切れに聞こえる甘いジャズヴォーカル。それを機嫌良く口ずさむ彼の柔らかな歌声・・・私だけのスタンダード・ナンバー。

「今日は、とことん甘やかしてやるからくすぐったくて首をすくめた。」

「・・・やめてください」

「・・・させてよ」

甘えるような口調に本当は絆^{ほど}されているのに。

「だめ」

意に介さず真也はふふ、と笑いながら髪に温かい風を入れてゆく。恥ずかしいだけならまだいい。

髪の手でさえ、彼に触れるとおかしくなる。

想いを通じ合わせて、こんなに近くにいて、これ以上何を望むのかと思うのに、どんどん欲しがる気持ちに歯止めが利かなくて。

心も、身体も、声も、彼を残らず自分のものにしたい。

自分を全部、彼のものに、したい。

欲望を逃がすように吐く、何度目かの長いため息。

髪が乾いたらしく、ドライヤーの音が止んだ。途端に溢れ出すハスキーな女性ボーカル。

「・・・この曲なんていうの？」

「I've Got You Under My Skin」

まだ温かな智の髪を梳きながらキスをする。

「どういう意味？」

「『私はしっかりあなたのもの』。うまくいかない恋だと思って諦

めようとしてたのに、皮膚の下まであなたが入り込んできちゃうもない、また恋に、引き戻される」

後ろからきつく抱きしめる腕。

「この部屋で、どれだけ君のことを考えてたか、分かる？」

背中から彼の声が響く。

「夢中になればなるほど俺には傷つけることしか出来ないといつも思いながら、恋の歌を聴いて」

つむじにキスを落としながら。

「君に首ったけっていう言葉はなんてたくさんあるのかって。I've Got You Under My Skin、I've Got a Crush on You、I Thought About You、I'm Crazy about you」

正面に向き直って、少しの隙間もないようにしっかりと抱き合^{いだ}う。

「もう、」

真也の声は自分の声。

「離さないから」

いっそ皮膚の下まで入り込みたい。

「どうしてそんなに古い曲をたくさん知ってるの？」

ベッドの中で、もう何曲聴いたのか。真也がベッドを出るのは、曲が終わってオーディオを操作する時くらいだった。

「Juneのマスターがジャズやスタンダード・ナンバーが好きだね。あそこ昔はジャズ喫茶だったんだよ。母親が忙しかったから、小さい頃から随分入り浸ってた。マスターが自分の親父で、順が自分の妹みたいでさ」

順の名を聞くと胸が痛む。真也は智の気持ちを察してさらに身体をきつく抱き寄せる。

「大丈夫だよ。順とはほんとに何でもないんだ」

「そう思ってるのは真也さんだけで」

ビートルズを歌ったあの時の彼女の顔が忘れられない。

「・・・真也」

説き伏せるようにそつと口づけて。

「じゃあ、もし順が本気だとしたら、智は俺を譲るの？」

途端智はぶんぶんと首を振る。満足げに真也は頷いた。

「そうだろ。それでいいじゃん」

「・・・真也」

「俺をそう呼べる女は、身内以外では智だけだ」

彼の瞳が強く物語る。だから呼んで、君だけの俺の名を。

「真也」

思わず涙が溢れる。

「智、幸せになる？もう俺たち十分苦しんだよな。だけどそれも一緒に居られるためだったとしたら、今までの人生だってそう捨てたもんじゃない、って思わないか？」

左手を捕られ、甲にキスされた。

「約束して。ずっと俺の側にいるって」

「・・・約束、する。側に、いる！」

智は泣きじゃくりながら、彼の胸に縋り付いた。真也は智の頭をぽんぽんと叩く。その時、彼が離れた左手に違和感があった。

「？」

気がつけば、智の薬指には指輪がはまっていた。

「約束、な」

そう言つて真也が微笑む。智は見開いた目で真也の顔と指輪を何度も見返した。

「いつの間に」

「・・・だから言ったでしょ、里奈ちゃんにお礼いっといてつて。お駄賃はちよつと高くついたけど、あれ知り合いの店だから」

「！」

こないだ里奈といったジュエリーショップ。里奈にしては高い買い物をするなとは思っていた。関係ないのに私の指まで計られたり好みを聞かれたりして。

「急がせましたよ。これがあつたから1週間待てた」

いたずらがばれた子供みたいに肩をすくめて。

「俺の持つてるスキル、今夜のために総動員して。恥を忍んでお袋に頭下げて、シャンプーも、トリートメントもマッサージオイルも『スプリング』から貰ってきました。ベッドのリネンもみんな新品です！」

はあつと息を吐いて。

「俺、自分がこんなに必死になれるとは思わなかったよ。呆れた？」
「うっん」

全て手の内を見せてくれる今がいい。心が読めなくて苦しくて泣き明かす夜はもういい。

魔法使いでなくていいんだ。箒で飛べなくても、一緒に歩いて行ける今が嬉しいから。不格好でも、何も持っていなくても、あなたがいれば。

そろそろ夜が明ける。それなのに二人は固く手を握りしめてベッドに深く潜り込んだ。

「少し眠ろっ」

目が覚めてもきつと彼の腕の中だ。智は安心してゆっくりと目を閉じた。

今、この時間こそが解けない魔法みたい、と思いながら。

F i n

番外編く解けない魔法（2）（後書き）

最後までお付き合い頂きありがとうございました。智と真也の番外編は、もう一話続きます。

番外編く魔法使いは君（1）（前書き）

この後続くバレンタイン話の先行ストーリーになります。智と真也のウエディングです。どうぞお楽しみ下さい。

番外編／魔法使いは君（１）

黒豹の弟は、山猫だった。

フルムーンで働く智の元へひょっこり現れた、茶色い短髪を逆立たせたこの男は、

「はじめまして」

と言うなり、大きな瞳を輝かせて、にっと笑った。その三日月型の唇の形。衿を立てた白シャツに黒いパンツ、腰につけたエプロンから覗く櫛とシザー。まさか。

「真也の弟の誠也です。勝手ながら君の結婚式のヘアメイク担当になったから、ヨロシク」

目を瞬く智を尻目に、誠也はいたずらっ子みたいに大きな口を開けて無邪気に笑った。若く見えるが智より５つは年上の筈だ。彼は母千春の経営する同じビルの５階「スプリング」の美容師で、その腕と彼自身の魅力故に予約は数ヶ月先だと里奈が噂していた。くりつとした瞳は長い睫に縁取られて、真也とはまた違った母性本能をくすぐられそうなタイプだ。さもありなん。

「こないだ兄貴が暫くぶりに帰って来たと思ったら、いきなり『結婚する、なるべく早く。入籍だけでいい』っていうでしょ。『ブルーム』の店長である息子と『フルムーン』の店員の結婚だぜ？あの母が黙っていられるわけないでしょう。いっそそれならって、コネというコネを利用して、いい式場もがつつり押さえましたよ」

智は驚いて口もきけない。

「あれ、兄貴から聞いてない？この日空けとけて言っただけだった？」

誠也の言った日は確かに、昨日真也から『この日、智とご両親も、

何があっても空けといて』って言われたけど。てっきり結婚の挨拶だけだとばかり思っていた。

「悪いけど、『派手婚』決定だから。好みがあったら今のうちに伝えといて、言わなきゃどんどん進めちゃうよ」

こうして真也と智のウェディングは波乱含みで幕を開けたのだった。

「俺たちの結婚だよ、俺たちの！」

Juneのランチタイム、聞こえるぼやきは言わずとした真也のものだ。

「智だっている夢があるだろ？こういうところでやりたい、とか、こんな式にしたいとかさ」

ヘアアクセサリ「ブルーム」の店長真也の昼休憩は他の店員より短い。それは仕事馬鹿の自分で決めたことなのだが、同じビルで働く智と付き合い始めてからは、その決まり事を恨めしく思っているようだった。今もピタパンのサンドイッチを片手で頬張り、時計を気にしながら智の手を握っている。

「・・・でもせっかくしてくれるんだから。オーナー様だし」

智も同じサンドイッチを頬張っている。真也とJuneでお昼を取る日は絶対にパスタを選べない。いつも片手を取られているから。「俺のお袋じゃん！」

真也は握っている智の手をぶんぶん振った。

「とにかくお袋は一度走り出したら止まんないんだから！弟もそんなとこばかり似ちゃってんだよ。もうとにかく早く智んちに挨拶にいかなきゃ。ああ、どうしょ。悪魔に魅入られた！」

くすくすとカウンターでマスターが笑っている。

「とにかく嫌なことは嫌っていうんだよ？」

「・・・でも」

智は照れながらも真也を見上げた。

「真也のご家族に喜んでもらえてるなら嬉しいし、こんなに早くち

やんとしたお式が出来るなんて夢みたい」

「・・・！」

「嫌じゃ、ないよ？」

うう、と真也は唸った。

「この小悪魔め！」

立ち上がって素早く智の髪にキスすると、耳元で「今夜覚えてろ」と囁いて名残惜しそうに手を離す。マスターに挨拶するとつむじ風のように去っていった。

「もう、なんていうかさ」

マスターもあきれたように笑う。

「ここ、日本だよな？真也くんのスキンシップだんだん過激になってない？早いところ結婚してくれた方が、周りにとってもありがたいんだけど」

次の日には真也の母千春が待ち構えていて、真也と共にブライダルサロンに連行された。時間がかかると思われる智のドレス選びは後回しで、まずは真也の衣装選びになったが、千春はどんな衣装を出させ、嫌がる真也を何度となく着せ替えさせてデジカメで写真を撮る。何を着ても様になる真也に智も浮き足だつて、二人はまるで友達のようにきやあきやあ言いながら真也に注文を付けた。

「ああ、やっぱりシルバークレイのフロックコートはいいわね、シヤツもフリルびらびら、王子様風で！」

「でも、このダークグレイでベストに金の刺繍って言うのも捨てがたいですよ？」

「うんうん、こういう玄人めいた服って、真也のいやらしさが引き立っていいわあ」

「ですよ〜！」

「ほら真也、後ろ向いて振り返って！」

真也は頭を抱えた。どうして俺が着せ替え人形にならなきゃならない？なんでこの二人はこんなところで息が合うんだ。まずいぞ、早

く自分のを決めなければ、智のドレス選びの時間がなくなる。

「・・・俺はこっちで」

王子様は柄じゃない。ダークグレイの方がいやらしくるうがまだましというものだ。真也の選択に女二人は大きく頷いた。

「さすが智ちゃんの見立て！」

「後でその写真下さい！」

「・・・で、智のドレスは？」

それが楽しみでここまできたのだが、千春はにっこりしてしつしつと手を払った。

「当日までのお楽しみと言うことで、真也、帰っていいわよ？」

本当にあつという間だった。毎日のように式場やブライダルサロンに通って、週末は「スプリング」でのエステ、誠也との打ち合わせ。その間にも真也が泊まりに来てと駄々をこねるから、殆ど彼の部屋に寝泊まりして出勤した。

そして当日は来た。晴天に恵まれた5月の火曜日。千春が選んでくれたのは、ガーデンウエディングとチャペルが一緒になった式場だった。

「おい、開ける！」

これで何度目のノックだろう。焦れた真也の声に、智の髪をスタイリングしている誠也は大きな口を開けて笑いながら、

「花婿は黙って本番まで待ちやがれ！」

と一蹴した。そしてドアに向かってうっとりとした口調で、

「綺麗な髪だね、智ちゃん。こうしてアップにすると、うなじも真っ白で、吸い付きたくなるほど・・・」

「誠也！殺すぞ！」

さっきからこうしてわざと煽っているのだ。

「真也、待ってて？」

智は鏡越しに彼のいるドアの向こうに声をかける。

「チャペルで会お？一番綺麗にもらった姿で会いたいもん」
ぐう、と唸るような声がして。

「・・・分かったよ！誠也、余計な事したら兄弟の縁を切るからな
！」

最後にはん！と大きく一回、負け惜しみにドアが叩かれ、つかつかとどこか険のある足音が去っていった。

番外編／魔法使いは君（２）

「すっごく愛されてるよなあ。妬けるよ」

誠也は智の髪にスプレーを吹きかけながら、くっくつと肩を揺らした。

「え？」

「あ、言ってなかった？俺結構ブラコンなのよ」

こういうことを悪びれずにさらりと言っってしまうところはやはり兄弟だ。

「昔から頭が良くて、気配りが出来て、歌もダンスも上手いし、おまけにイケメン。男女問わず常に人気があったよ。俺はいつも後をくっついて、何でも真似して・・・美容師も一緒にやってけると思ってたけど」

誠也はため息をついた。

「まさか辞めるとはね」

智ははっとして鏡越しに誠也を見る。あの事件は当然、彼にも陰を落としていた。

「兄貴は小さい頃から『千春さんの跡継ぎ』だっって言われてきて、自分でも美容師以外の選択肢なんて考えてもみなかったんじゃない？当時はもう廃人みたいにひきこもってたよ。そのうち俺たちというのも辛かったんだろ、家を出て行つて。やっとここ2年くらいかな、実家にも顔を出すようになったの」

2年。その時点で美容師をやめてから3年は経っていたはずだ。そんな長い間闇の中にいたのか。快活で人を和ませる生まれもつての才能を持っているあの人が。

「見ていられなくなつた母が心を鬼にして喝入れて。無理矢理新店舗の店長を押しつけて。強引な性格がああのは役立ったな」

ふふつと笑って、鏡越しに智を見る。

「母もね、不器用な人だからね。父が早くに死んで、必死になって美容室を守ってきたでしょう。意地っ張りだし愛情を普通に表せないんだ。その結果がこんな形になっちゃって、御免ね？」

「いえ」

智も鏡越しに微笑んだ。

「嬉しかったですよ。だって歓迎されてるっていうことですよ？私なんて店員としても女性としてもまだまだで、お母様にどう思われるのか正直不安だったんです」

「相当、気に入ってるみたいだよ？仕事馬鹿なところが、自分に似てるって」

誠也はおかしそうに言う。

「何だそこかよ、って。お袋は仕事のためなら、恋も家族も二の次の人だからね」

「恋？」

意外な言葉に智は誠也の顔を見た。

「・・・恋、するでしょう、女なんだから」

どきつとした。無邪気に見える誠也の、男の顔が垣間見えた。

「女は支えられて強くなる部分であるからね。仕事してる女こそ結婚した方がいいって俺自身は思ってるんだけど、まあ、いろいろあって」

この男は何故こんなに女の立場を汲み取れるのだろう。

「・・・お母様の恋愛って、抵抗ないんですか」

「ないね。兄貴が結婚したから、もういいんじゃない？そろそろ自分の幸せ見つけても」

真也が去った後も誠也はずっと千春と一緒に住み、その側で仕事をしてきた。一番近くで千春を見てきたのだ。それだけにきつというんな葛藤があるに違いないのに、無条件で母の幸せを願っている強い人だ、と思う。

「兄貴ってさ、寂しがり屋だしあのルックスでしょ。昔は女が絶えた事ってなかった訳よ。でも美容師辞めてからは、表面上は軽いこ

と言つてても、深いところには絶対誰も寄せ付けなかった。正直、不能になったかと思つたもん。多分あの部屋に他人を入れたのも智ちゃんが初めてなんじゃない？お袋は、それを自分のせいだって悔やんでた。女に奉仕する職業のノウハウをたたき込み過ぎて、恋愛でなくなつたんじゃないかって」

「それ、真也さんにも聞きました」

「だからね、賢さん、Juneのマスターね、彼に兄貴と喧嘩した女の子がいたつて話を聞いた時、すぐ飛びついてね」

「あれは喧嘩したというか、私が一方的に怒鳴つて」

「でも兄貴のその時の様子が、いつもと違ってしおらしいから、ひよつとするんじゃないかって」

智は息を飲んだ。それである後、千春は「フルムーン」に偵察にきたのか。

「人生の先輩を侮つてはイケマセン。特にあの二人は長年客商売してるから、男女の機微については本当に敵わない。自分の事は後回しのくせにね」

ふふつと肩を揺らす。

「誠也さんは？」

智は彼の目をのぞき込んだ。

「へ、俺？」

「そうですよ。ご自分はどんなんです？」

「ふふーん、どうでしょう？」

にんまりとしてうまく交わされる。この人こそ自分の幸せを後回しにしているのでは？

「まあ、とにかく、今日は自分の幸せに集中して。誰よりも綺麗にして兄貴の度肝を抜かせてやるから」

「・・・お願いします」

「まっかせなさい！」

幸せにならなければ。

真也を幸せにすることが、この家族の幸せの第一歩だ。

智はすっかり前を見据えた。

そして、その時はやってきた。

扉の前に父とふたりで立ち、ふうつと息を吐く。しかし傍らの父の方ががちがちに緊張していて、くすつと笑ったら少し落ち着いた。扉が開けられ、長いトレーンを曳きながら智は一步を踏み出す。

正面から見るとミニスカート、脇から後ろにいく程フリルが連なつて裾が長くなっているこだわりのドレスだ。最後まで迷っていたが、千春の「若いんだから足は出していきましょ！」の一言で決まった。絶対付けたかったサムシング・ブルーのガーターベルトは、細めの物を選んでかなり太ももの方に隠さなければならなかった。白いフリルに小さい青い花が散りばめられた幸せのおまじないは見えていては意味がない。ミルクティー色の髪は真也によつて艶やかに結い上げられ、シニヨンのてっぺんから巻き毛がふんわりと垂れている。まばゆく光る肩から伸びる白い腕の先には、クレセントと言われる三日月型のブーケ。グリーンของルスカスに白薔薇とブルースターという名の小さな淡い青の星形の花が散りばめられ弧を描いている。ヘッドコサージュも同じ白薔薇とブルースターで、智の顔をとりにて微笑むように揺れた。誠也の渾身の技術が施された肌は内側から光り輝くようで、幸せに上気した頬がさらに明るく智本来の愛らしさを引き出していた。

神父と共に祭壇で待つ真也は、歩んでくる智を見てぴかぴかの靴の爪先にぐつと力を入れた。ダークグレイのフロックコートは背の高い真也をさらに際立たせる。金の刺繍の入ったベスト、胸に挿した白薔薇のブートニアも、緩やかなウェーブのかかった黒髪の彼にはきまりすぎる程しっくりときまる。全身にしなやかな男の色気を纏つてはいたが、彼の顔は智と分かち合う喜びに満ち溢れ、まるで少年のようにはにかんで初々しかった。

長いベールに包まれた花嫁はゆっくりと彼に近づいてくる。ミニスカートのフリルから伸びるすんなりとした足。智のイメージにあ

った可愛らしいブーケ。デコルテも肩も首筋も雪のように白く輝いて。近づくにつれ見えてくるその表情はいささか緊張して、それでも今日のこの日に高揚する気持ちが匂い立つ様だ。彼の側に立つと伺う様におずおずと見上げて、にっこりと笑う。ああ、俺の花嫁なんだ。真也は幸せに目が眩みそうになった。

誓いの言葉も指輪の交換も舞い上がっていてよく分からぬまま、気づけば口づけていた。触れて初めて確信する。相手が自分のものに、自分が相手のものになったのだと。

「愛してる、智」

それだけ口にする、智の返事も待たずにまた唇を重ねた。途端巻き起こる歓声。お得意の指笛はJuneのマスターだ。神父も困ったように二人を見ていたが、真也は構わず智を固く抱きしめた。やっと唇を離して列席の人々に顔を向ける。深々と礼をして顔を上げると、いくつもの馴染みの顔が見えた。一役も二役も買ってくれた友達の里奈、店長の木暮。Juneのマスターに娘の順。智の両親に姉、友達。そして誠也と母の千春。皆が輝く笑顔で手を叩いている。

沢山の祝福を受けて智は幸せの涙が止まらなかった。

番外編／魔法使いは君（3）

式場の扉を開け放つと、明るい陽光の中に大勢の人々がふたりを待っていた。籠一杯の花びらが真也と智に降りかかる。その中で智は真也に囁いた。

「取って？」

「は？」

智は突然ミニスカートの左足を上げた。ちらりと覗く白いレースに青い小花のガーターベルト。

「おいおい！」

慌てる真也を尻目に、

「花婿が外すのよ？本当は、口で取るんだけど」

と言って彼の手を誘導する。興奮した男達の歓声。真也は震える手を智の足に滑らせて何とか華奢なレースの輪を外した。

「投げて。独身の男の人に」

今日は何でこんなに大胆なんだ？智の提案に真也はめまいがする。

「誰にだよ！こんな、智に触れてた物を！」

「次の幸せのお裾分けだから」

智が微笑んでくいつと親指を差した先には、化粧直しのため待機していた黒いスーツ姿の誠也がいた。真也は「くそっ」と言いながら、青い小花のついたレースの輪を弟に向かって放り投げた。誠也は高く手を上げ満面の笑顔でキャッチすると、受け取ったガーターベルトをくるくると振りかざす。途端に外野からああっ、というため息が漏れた。

「赤の他人よりマシでしょ？」

につこりと天使の笑顔、いや小悪魔の笑み？ああ、本当に敵わない。

列の後ろの方に控えめに並んだ斉藤夫妻が目に入る。智がこたわ

ったサムシングフォーの言い伝え。ブルーはガーターベルト、ニユーは新しい下着をつけた。オールドは千春に借りたピアス、そしてボローは幸せな結婚をしている人に借りる物だ。

「斉藤さん、ありがとうございます」

真也とタップダンスのペアを組んだ斉藤信吾は、白髪交じりの髪に銀色のアスコットタイと黒いタキシードがよく似合う。妻のみはるも桜色のワンピースを着て、子供のようにぱちぱち手を叩いている。

「素敵、素敵！智ちゃんすごく可愛い！真也さん色っぽーい！」

「すみません、もうさつきから泣きっぱなしで、お借りしたハンカチ駄目にしちゃうかも」

智はみはるに借りたハンカチを振った。

「どうぞ、どうぞ！思いっきり使っちゃって！私たちまで呼んでくれてありがとう！こんな素晴らしいお式、なかなか体験出来ないわ！」

「息子さんだつて、あの調子じゃすぐでしょう」

真也が冷やかした。

「どうかしら。ああ見えて結構慎重なのよ？」

ふふ、とみはるも笑った。

進んでいく先に千春の姿が目に入った。淡いブルーのスーツに身を包んだ彼女は真也の母とは思えないほど若々しく美しい。腕を組んで堂々たる立ち姿だったが、よく見れば綺麗に化粧を施された目は涙でくしゃくしゃになっていた。

「・・・お袋。今まで心配かけてごめん。いろいろ、ありがとな？」

照れくさそうに真也は初めて母に礼を言った。千春の目からさらに涙が溢れ出しハンカチで目を拭う。後ろで見ていた誠也もポケットからカメラを取りだし、ふたりの様子を微笑みながら何枚もシャッターを切った。

「あの・・・お母様」

ふたりの間におずおずと智が割って入った。耳には千春に借りたダイヤモンドのピアスが煌めく。真也の父が千春の誕生日に贈ったという思い出の品だ。

「これを」

智が差しだした物を見て、真也も千春も、そして列席の人々も息を飲んだ。それは白薔薇とブルースターの三日月型のブーケだった。「何言ってるの!」

千春は思わず後ずさった。

「智ちゃん、気持ちは有り難いけど花嫁のブーケよ? 私みたいなおばさんにあげてどうするの。こういうのは次の結婚を待つ若い人でしょ、ほら里奈ちゃんとか、順ちゃんとか」

智は首を振った。

「いいえ、お母様に」

じつと目を見る。

「・・・今度はお母様に幸せになって欲しいから」

「な、何なの! 誠也、何か言っただんでしょ!」

千春は真っ赤になって誠也を見るが、誠也はとぼけて上を向く。

「・・・受け取って下さい」

智の声にいつしか会場から拍手が起こった。千春は渋々受け取ると、小さな声で少女の様に「ありがとう」と言ってもじもじした。次の瞬間、鳩が解き放たれた。きしむような羽音と共に何羽もの白い鳩が青空高く舞い上がる。真也と智は顔を見あわせて微笑んだ。幸せにならなきゃね、という無言の誓いと共に。

披露宴は盛況だった。Juneのマスター、賢は蝶ネクタイのタキシード姿で真也の小さい頃から今に至るまでの数々のエピソードを暴露した後、ピアノを弾きながら「Our Love Is Here To Stay」を歌った。

これだけは、はつきりしてる

俺たちの愛は、ここにある

ラジオも、電話も、映画も

所詮は淡い夢のようにいつかは消える

でも 俺たちの愛はここにある

二人して 長い長い人生を 一緒に歩いて行こう

例え ロッキー山脈が崩れ ジブラルタル海峡がつぶれようとも
それはただの土の塊になるだけさ

でも俺たちの愛は、ずっとここにある

さすがに真也の師匠、甘い声で歌うスタンダードナンバーに会場からため息が漏れる。皆うつとりと聞き惚れて惜しめない拍手を送っていた。

列席者のお土産に、智は自分で焼いたクッキーを用意した。ずっと実家で育てているスパイスを練り込んで今朝までかかって仕上げた力作だ。可愛い袋に詰めて見送りの時一人一人に手渡した。

「里奈！ありがとう！」

二人の縁結びの神だった彼女は、受付や小物の管理など今日も大変な役を引き受けてくれた。

「ブーケじゃなくてごめんね」

智は髪に挿してあった白薔薇とブルースターのヘッドコサージュを惜しげなく里奈に差し出した。もう一人のの仕事馬鹿、ヘアアクセサリー「ブルーム」の店員の彼女にはまたとないプレゼントだ。

二人は固く抱き合って涙をこぼした。

「智を幸せにしないと許しませんから」

涙目で睨まれ、真也は何度も頷いた。

里奈の後ろには順が立っていた。

「順さん！やっぱり似合いますよ、その服にして良かった！」

順の着ている淡いオレンジ色のワンピースは智が選んだ物だ。こ

んな色着たことないからと躊躇する順を、私の結婚式なんですから着てくれますよね、と半ば脅すように勧めた。マンゴーのような明るい色が順の白い肌をさらに引き立てて華やかにする。高い衿が首筋で反り返る様なデザインが印象的で、マーメイドラインがスレンダーな順の身体をより女性らしく見せる。智は手に持った籠の底からクッキーの袋より10倍は大きいと思われるリボンのついた袋を取り出すと、真也の胸についた白薔薇のブートニアを抜き取り、そのリボンに差して順に手渡した。

「これ、順さんに」

「なあに？」

持ち上げるとしやらしやら音がする。

「今日のクッキーに使ったキャラウェイ・シードです。実家の庭で作ってるんですよ」

「ザワークラウト作ったり、パン焼く時に入れると美味しいわよね」
さすがに順は詳しい。

「なかなか売ってないでしょう、順さんなら使いこなしてくれるだろうと。余り物みたいに見えるかもしれませんが、これはちゃんと順さん用に用意したんですよ？」

「ふうん、ありがとう」

それにしても何故、キャラウェイ？訝しげに智を見る順に、智はにっこりして、

「知ってます？キャラウェイって恋のスパイスなんですよ」

「こ、恋？」

「恋人をつなぎ止めるとか、媚薬になるとか、いろいろ逸話があるんです。だから試してみても下さいよ、ね？」

にやりとする智を苦々しい顔で順がたしなめる。

「智ちゃん、カリスマ振りは『フルムーン』だけにしてくれる？」

それだけでなく順は最近この可愛いカリスマに振り回されて、かつてない変貌を遂げているのだ。順はため息をつきながらも智に微笑みかける。

「・・・大事にするわ。まずは今度お昼のサンドイッチのパン焼く時にでも使ってみる」

「わあ、楽しみ！」

真也は以前、順が真也に好意がある、と智がこだわっていたことを心配していた。しかし最近ふたりは姉妹のような仲良し振りで、真也が入り込めない位だ。頑かたく々な順の警戒心まで解く智の魔法に、微笑みを隠しきれない真也だった。

番外編く魔法使いは君（４）

式が終わり、新郎控え室にノックの音がして、誠也が顔を出した。

「兄貴、お疲れ」

真也はフロックコートのまま椅子にもたれて座っていた。

「ん。お前もご苦労さん」

「・・・いい仕事したっしょ？」

ほくそ笑む誠也に、真也は渋々頷いた。

「悔しいが認めよう。智はすごく綺麗だった」

片手をあげた真也に、誠也も片手でハイタッチをする。さすがに疲れた。二人はそのまま大きくしなやかに伸びをした。

「このままハネムーンに行けたら良かったね」

「式だけで精一杯だったからな、そのうち」

タイを緩める真也に、誠也が冷やかす。

「どうせ毎日がハネムーンだもんな？」

「・・・何言ってるんだ。用がないならさっさと行けよ」

真也はにやつく誠也を追い払うように手を振ったが、誠也は胸ポケットから手品のように出した一枚のカードを二本の指に挟み、ぴらぴらと揺らした。

「要らないのかなあ？ハネムーンのないお二人に、俺からの、せめてものお祝いなんだけど？」

「は？」

「この式場の上、ホテルの３階、３０１号室のキイ。ちゃあんとスイートルーム仕様だから」

ふふん、と得意げに笑う。

「智ちゃんにはまだドレス脱がないで待ってて、って言っているよ？」

その言葉が終わらないうちに、真也はカードをひったくる。

「恩に着る！」

荷物を掴むと、真也は階段を駆け上がった。

息を整えながら、スイートルームのドアをノックした。

「はい、どうぞ？」

てつきり式場の人が着替えの手伝いに来てくれたと思ったらしく、よそよそしい声だ。

真也がドアを開けると、智は窓際のレースのカーテンの前にこちらに背を向けて佇んでいた。ベールを外しているので、白い背中の凹凸が窓から差し込む夕陽に照らされ美しい陰影を描いているのが見える。

「……ん！」

肩甲骨の間にキスを落とされて、智から甘い声が漏れる。

「……翼が生えてないか、確かめた」

そんな台詞も、彼なら許せてしまう。智はゆっくりと振り返った。

「綺麗だ……本当に、天使みたい」

真也はじつと眺めて、ため息をつく。智もうつとりと真也に視線を滑らせた。

「あなただつて」

「……君の見立てだろ」

「誰にも見せないで、しまつときたい」

俺なんて、と真也は首を振った。

「欲しければどうぞ。全部、君のだ」

智の両手をとった。

「……君は本当に、今日から俺のもの？」

「そうよ」

躊躇わずに答える智に、思わず緩めたタイの奥で喉仏が上下する。

「……人前で足に触らせるなんて」

すつとミニスカートから伸びた太ももに手を滑らせる。

「ひどい拷問だった。君が男達の卑猥な目に晒されるのも我慢出来

なかったし」

そのまま膝裏に手を入れて、事も無げに智を抱き上げる。

「・・・この堕天使！」

ドレスの裾が滝のようにこぼれる。白いヒールがことん、ことんと右左一つつつ順番に落ちて。唇を啄まれながら寝室へと運ばれる。

「あの窓から、さつきパーティーをしたお庭が見えたの」
キスの合間に智が呟く。

「見ないの？ねえ、夕日がとっても綺麗だったよ？」

「景色なんてどうでも」

天蓋付きのダブルベッドに落とされた途端、キスが噛みつくようなものになる。首筋へも、まるで食いちぎられんばかりだ。皆にあげてなくなってしまった白薔薇の代わりに、鎖骨の上、開いた胸元、点々と赤い花が咲く。

「待つて」

「待たない」

一瞬唇を離してぐつと視線が絡みつく。黒豹が獲物を睨め付ける目だ。

「俺のものなら、好きなようにさせて？」

そう、さつき、言質を獲られていた。

「・・・『今夜は、そういう夜』だから？」

智は微笑みながら、いつか、初めて思いを遂げた日の彼の言葉をなぞった。

「・・・わかつてるじゃないか」

タイに手をかけながら、ふふん、と三日月のように微笑む。

「最後だから聞いてあげよう。思い残すことはないかな、生け贄くん」

「・・・急がないで？」

と彼のタイの上に手を重ねた。

「素敵なんだもの、もつと見ていたい。私に、させて？」

そう言うゆつくりタイを外していく。

「今日は強気だな！」

そう言いながらも本当は焦れて、服なんて自分でむしり取りたくなる。朝から翻弄されてばかりだ。

「あの照れると敬語になる、しおらしい智はどこに行っちゃったんだ？」

からかう真也に智は、

「飼慣らされたの」

しれつ、と答えて、ベストのボタンをゆっくりと外す。真也は、

「違うない」

とほくそ笑むと、再び目の前の獲物に集中した。キスの音で智の肌に次々と赤い薔薇が花開く。咲くほどに智からは熱い吐息が漏れた。

「・・・真也」

「何」

「幸せ？」

「当たり前だろ、こんな幸せな日はないよ。智は？」

「・・・あなたが幸せなら、私も幸せにきまつてる」

全てを包み込むような瞳で愛しい伴侶を見上げる。真也は固く智を抱きしめた。

これからも、何度となく泣かされ、何度となく喜びを与えられるだろう。

いつまでも僕だけに呪文をかけて。

君は、僕の魔法使い。

F
i
n

番外編く魔法使いは君（４）（後書き）

ここまで読んでいただいた皆様。本当にありがとうございました。智と黒豹真也のお話はこれでおしまいです。この後、新作カッパルのバレンタイン話があります。登場人物は約３人。名前は伏せますが、多分２人はすぐわかります。もう一人は連載までのお楽しみということにさせて下さい。皆様にも素敵な魔法がおきますように！

番外編／俺の可愛いヴァレンタイン（1）（前書き）

これは次作のカップルの2012年のヴァレンタインという設定です。ですのでこのヴァレンタインは火曜日になっています。智と真也の結婚式から9ヶ月後の物語です。

番外編く俺の可愛いヴァレンタイン（１）

俺は、バレンタインに期待なんてしない。

チョコレートは好きだし、くれる子も結構いるけど、好きじゃない子からの好意を受ける気はさらさらなくて。

きっぱり断ると、その子の友達の思わぬ反撃を受けたり、女子総スカンなんていう有り難くない状況に陥おとしれたりして、決して甘い思い出ばかりじゃない。

その一方で俺は、素っ気ない年上の彼女にずっと好きだ好きだと言いつづけている。

デートだつてしたし、キスだつて済ませた。多分・・・いや絶対、俺達は想いを通じ合っているはず。

なのに彼女は皆の前では、まるで俺の事なんて見えてないみたいに振る舞う。５つ位の歳の差なんてなんだよ、と思うけど、彼女は大人ぶって俺をたしなめる。いつも俺だけが馬鹿みたいに翻弄されて、夢中になつて。

それでも好きなんだから、しょうがないんだけど。

俺が通う大学は彼女の勤める喫茶店からバイクで５分。金と時間の余裕がある時はいつも彼女が勤める喫茶店でランチを食べる。店のランチはいつもサンドイッチかパスタのチョイスで、パン好きな俺はいつもサンドイッチ。今日のサンドイッチはスモークチキン、癖のあるチーズとドライトマトがアクセントのフォカッチャ。サラダとコーヒーがついておしまいのはずが、今日はその皿の隅にマッチ箱くらいの小さなブラウンの塊が乗っかっている。この甘い香りはチョコレート？

「あ、ほら、明日はその、そういうイベントだから」

俺が尋ねれば、そんな返事。バレンタイン、ていうのも嫌なのだよ。別に俺は全く気にしないし勘違いもしないのに。

俺はフオークでその四角の一边を切って、ぱくんと一口、口に入れた。しつとりとした生地にこくのあるビターなチョコレートが練り込まれている。シンプルな見かけからは想像出来ない、ちよつとりキールが効いてる大人仕立てのガトー・ショコラだ。その中に感じるざらつとした食感と独特の風味。

「中のこれ、何？」

「えっ？」

彼女は目を見開いた。そんなに驚くことか？俺の舌がいいのは知ってるだろ？

「このぷちぷちしてんの、何？」

彼女はちよつと面倒臭そうに

「・・・キャラウェイ・シード」

と答えた。もぐもぐと噛みしめると爽やかな香りと後味にひりりとした微かな辛みが残って、甘い菓子がいいアクセントになっている。好みは分かれるかもしれないけど俺は好きだな、これ。

「とも、友達がこのスパイス育ててて、お裾分けしてもらったの」「なんか噛んでるし。話を聞きながらも、俺は口の中でもったりと蕩けるチョコレートをうつとりと飲み込んだ。

「ん〜！ご馳走様」

「もう、食べちゃったの」

「うん、だってあなたのランチはいつも美味しいもん。デザートも最高だった」

そう言って微笑んでも、彼女はにこりもしない。俺は名残惜しいけれど渋々席を立つ。彼女は忙しいランチタイム、俺もこれから授業が入っているし、長居をすると怒られる。それでも結構もの分りのいい男なんだよ、俺は。

「じゃ、またね」

と手を振れば、ちよつと哀し気に笑う。俺がいなくなると少しは

寂しい？そんな事聞いたって絶対答えやしないだろうけど。

食べ物の事に関しては人一倍好奇心旺盛な俺は、大学の帰り、行きつけの輸入食材の店に寄って、さっそくキャラウェイ・シードとやらを探してみる。果たしてスパイスのコーナーにその瓶はあった。手にとろうとすると、

「おや？」

と後ろから声がした。振り向けば、背の高い俺と張る、すらりとしなやかな黒い服の男。俺の天敵、というか、俺の恋人に妙に馴れ馴れしい彼女の幼なじみだ。いわゆる男前の彼は、につ、と笑うと大きな口が三日月みたいな弧を描く。一応彼女の兄兼ボディガードのつもりなんだろう。やけに俺に突っかかってくる。

「あれ、今日はストーカーお休み？ランチにいなかったよね？今日のサンドイッチも美味かったぞ？」

やな男だ。一応恋人だつつうの。

「スモークチキンのフォカッチャでしょ？さっき食べてきたばかりです。そっちこそ店長がこんなところで油売ってていいんすか」

彼は彼女と同じビルのヘアアクセサリー屋の店長をしている。

「休憩で飲むコーヒーの粉がなくなっちゃったのよ」

指さしたレジの横で豆を挽くミルの音がする。店長自らご苦労なこった。こういうマメさがもてる秘訣なんだろうなあ。俺はたった一人に向けてしか出来ないけど。

「君は何見てんの」

彼は肩越しに俺が手に取った瓶を覗きこんだ。

「キャラウェイ・シードか」

何で知ってる？俺がむつとすると、彼はにつこりして、

「俺の奥さんが実家で育ててるんだ」

と聞きもしないのに答える。そう、この男は結婚してまだ1年にもならない新婚で、ちゃらちゃらしてる割にはその奥さんを溺愛している。

「俺たちの結婚式で、奥さんがこれが入ったクッキーを焼いてお土産にしたんだよ。前の晩に徹夜して作ってたもんだから、あの日の夜はじつくり可愛がつてやろうと思ったのに、散々焦らされたあげく、あつという間に寝られちゃってさあ。紛いなりにも初夜だよ、初夜」

「・・・恥じらいって言葉、知ってます？」

勝手に甘い思い出に浸る彼を無視して、スパイスの側に置かれたレシピや説明が書かれたメモを手取る。一枚取って読んでみると「恋に効くスパイス？」

思わず声を上げてしまった。その昔媚薬として使われたとか、恋人を引き留める効果があるとか、いろんな逸話が書いてあって、バレンタインのための「恋に効くレシピ」までついている。いやいや、あの彼女が、まさかね。

「そうそう、恋のスパイス。俺の奥さんもそんなこと言つて、結婚式の日、お前の思い人にたんまり渡してたぞ？」

「えっ」

そう言えば話してた。友達にお裾分けしてもらったんだと。

「気付かないとこ見ると、あのキャラウェイはまだ食べさせてもらつてないな」

幼なじみの彼はにやりとほくそ笑む。

「・・・いや、今日のランチのデザートで」

俺は半信半疑でそう言つと彼はきよんとする。

「デザート？」

あれ、彼もランチ食べたんだよな？

「フォカッチャのサンドイッチ頼んだんでしょ？」

「そうだけど？デザートつて？」

「え・・・！」

突然、俺の心にぱん！と音をたてて花が咲いた。

あれは。

素っ気なく飾り気のないシヨコラ。舌の上でそつと香り、その食

感で存在感を主張する、ちよっぴり辛いスパイス。

・・・俺に。

俺、だけに。

じわじわと笑みがこぼれる。

生まれて初めて、バレンタインという日に感謝した。

「・・・じゃ、授業に遅れるんで！」

俺はキャラウェイの小瓶を掴むとレジに向かった。

訳が分からずぼかんとした色男を残して。

番外編／俺の可愛いヴァレンタイン（2）

今日は火曜日、バレンタイン当日。俺は大学の授業を終えるとバイクに乗って、隣駅近くのバーナードカフェのバイトに行く。彼女の火曜日はというと、勤めている喫茶店の定休日で、午後から料理教室のアシスタントのようなことをしていた。それがこの浅葱駅界限なので、帰りに俺のバイト先のカフェに寄る。

お気に入りのヘーゼルナッツ・ラテを飲みながら、ノートやデジカメを開き、教室でやったことの復習をするのが彼女のきまりだ。記憶が途切れる前にまとめておきたいらしく、教室からほど近いこの店が最適なのだという。

「おい、お呼びだぜ？」

バイト仲間がうんざりした顔をする。俺は今日、志願してキッチンに立っているのに、さっきから何人かの女の子がチョコを持ってやってくる。いつ彼女が来るか、そればかりが気懸かりだ。俺は嫌々ながらカウンターに向かった。

「・・・これ、受け取って下さい」

女の子の手から、リボンの間に手紙が挟まった高級チョコレートの箱がずいと差し出される。

「すみません、俺仕事でなんで」

同じ言葉を何回も繰り返す。

「ご迷惑かけてすみません、でも受け取って欲しいんです」

ばしッと決めた化粧に巻き髪、自信ありそうな表情。今度の子は手強そうだ。

「悪いけど、付き合ってる人がいるから。その人からしか要らない。」

「受け取ってくれるだけで、いいんです」

殊勝な事を言いながら引く様子がない。

「悪いけど」

「お願いします」

「本当に要らないんだ」

「つきあっているって、あの年上の人ですか。似合わないと思います。だって・・・」

その言葉に、かつとした。俺はその包みをひょいと取り上げると、ダストボックスへ思い切りばすん、と捨てる。カウンターのなかからも、客の間からも、しんと冷えた空気が漂った。

「勤務中ですので、失礼」

キッチンに下がる。わっ、という泣き声と共に、かつかつと走り去るヒールの音が響いて自動ドアがしまった。店内の空気はまたゆっくりと元に戻ってゆく。

うるせえ。料理がうまくて、頭が良くて、はつとするほど綺麗で・・・大人で。彼女に似合わないなんて俺が一番知ってるさ。だけどこの気持ちはどうしようもない。俺は腹立ち紛れにホイップクリームをやたらにかき回した。

少しすると彼女はやって来た。柔らかそうな茶色の髪、ちよつと物憂げな瞳、小さな肩。彼女を見るだけで、棘だらけだった俺の気持ちは、花屋がするみたいに一息につるんと滑らかにされ、胸の中には匂い立つ薔薇の花しか残らなかった。レジに来ると相変わらず俺に気付いてないようなふりで注文をする。構わずにつこりして目配せをしてやると、ちよつと反応して僅かに赤くなるのが可愛い。彼女は勤務中より仕事を離れた所の方が断然素直だ。注文を待つ間、カウンターに佇む姿も愛しくて、手元が狂いそうになった。いやいや、失敗は許されない。

「お待たせしました。」

かたん、とカウンターに置いたカップ・アンド・ソーサー。いつものラテのカップに寄り添うように置かれた、切手くらいの茶色いクッキーが3つ。

「・・・これ、頼んでないけど。何？」

無表情を装い彼女が言う。

「サービスです」

俺は営業スマイルで返しながら、耳元で囁いた。

「今日はバレンタインだから」

彼女は又激しく動揺して、赤い顔でふらふらしながらラテを持って席につく。いつもの様にノートとデジカメを出して書き物を始めたが、どうにも進まない様子で、ため息ばかりついている。そのうち観念したように肩を落とすと、皿に乗ったクッキーを口に入れた。わかってくれるだろうか。しっかりと噛み砕くと、突然はつとしてせっかく落ちていた顔色がまたじわじわと赤くなる。ほんと、飽きない。それでも彼女はゆっくりとそれを食べながら、ノートに専念し始めた。時々ぼろりとクズが落ちるが、ナプキンを敷いてあるらしく、小さなけからももう一度指先で摘んで口に入れている。一粒だって落とさない、というように。いじらしい仕草に俺の心はじんと温まった。

その後も俺にチョコを持ってくる女の子は何人かいたけれど、今度は余裕の笑顔で交わすことができた。彼女さえいれば俺はご機嫌だった。

バーナードカフェにかかる音楽はいつもジャズ。今日はバレンタインにちなんだ愛の歌を流しているの、何度となく繰り返すその旋律も歌詞も耳について離れない。

同じ曲で、なんとまあ色んなバージョンがあるものだ。マイルス・デイヴィスのトランペット、ミルト・ジャクソンのヴィブラフォン、ミシエル・ペトルチアーニのピアノ。ヴォーカルだって、サラ・ヴォーン、トニー・ベネット、エラフィッツジェラルド、ナット・キング・コール。

俺のために 髪の毛一本だって変えないで
もし 俺のことを思うなら

変わらないで

いとしいヴァレンタイン

そのままできて

毎日がヴァレンタイン・デイだから

そのうち俺のバイトの上がり時間になった。彼女は何も言わないけど、一緒に帰るつもりで、わざとこの時間まで待ってくれているようだ。なぜなら彼女の火曜日の服装は、タンDEMが出来るようにいつもパンツ・ルックだから。

俺はバックヤードで着替えを済ますと、彼女のテーブルに近づき、コンコンと軽くテーブルをノックした。ふっと見上げる視線。他の人からだと平然として見えると思うけど、俺には分かる。ちょっと照れて、困惑している。

「・・・帰ろっか」

俺は彼女のとつくに空になったカップとソーサーを慣れた手つきで片付けた。

バイクを押しながら住宅街を歩く。近くの公園までは子供も多い細い道なので、タンDEMは避けたい。

「何で、男の君きみからクッキーを貰わなきゃいけないのよ。ていうか、キャラウェイのクッキーなんてどうせ君の手作りなんでしょ。またバーナードカフェのオープン、無断で使ったのね」

お説教はいつもの調子だ。

「いや、無断じゃないよ」

「え？」

「今日、俺はタダ働き。今日のバイト代を交換条件にして、昨日の夜オープンを借りた」

彼女の目がはつと見開いた。

「先にキラウエイを『盛った』のは、あなただから」

にやつと笑ってじつと彼女を見ると、明らかに動揺している。

「も、盛るなんて！毒薬じゃないわ！」

「・・・でもあなたは、知ってたんでしょ？」

俺は名探偵ポアロさながらに、もったいつけて彼女を追いつめる。

「あなたの幼なじみのろくでなしが言ってた。結婚式の日、彼の奥さんに『恋のスパイス』だって渡されてた、って」

はあつと観念した彼女のため息が漏れる。

「・・・効いたよ」

俺はバイクを置くと、公園の木の陰に彼女を引つ張り込んだ。

「もつと、もつと、あなたが好きになった」

彼女の身体を樹にもたれさせて、逃げないように綺麗な顔の両側に手をつく。微笑みながら見つめれば、長い睫がふるふると震えた。

「あんな可愛いことしなくなつて」

彼女の手を取って、手の甲に口づける。

「俺はとつくの昔から、あなたに首つたけなのに」

彼女は訳も分らず首を振る。

「・・・今日、君目当て女の子が、何人も来てたじゃない
見てたんだ。」

「俺があなたから離れるとでも？」

何度言ったら分かるの。どんなに言い寄られても、あんな女共に興味なんかないんだよ。

「順さゝん」

俺は腰を折って、彼女が弱いという上目遣いで見つめてやる。

「大好きだからね？」

ぼつと音がする程、急激に赤くなる。

「俺のキラウエイはどう？効いてきた？」

「きゃっ！」

高く抱き上げると身体を硬くして悲鳴を上げる。俺は声を上げて

笑いながらぎゅっと抱きしめると、するすると身体を滑らせるようにして地面に彼女を下ろした。

熱く見つめれば照れて下を向くから、彼女の両頬を両手で挟んで、甘く甘く口づける。口付けが深くなる程に、おずおずと俺の背中に回ってくる小さい温かな手が愛しい。

キスの合間に囁いた。

「愛してるよ」

甘くて辛い、君というスパイスを。

「・・・俺の可愛い、ヴァレンタイン！」

F i n

番外編く俺の可愛いヴァレンタイン（2）（後書き）

バレンタインのお話を書きたくて、フラッシングで書いてしまいました。

もてるのに自分のことは気付いてない天然振りが憎めない彼と、頑固で照れ屋な彼女。

少しお休みを頂いて、この二人のお話を少しずつ書き進めてまいります。

連載が始まりましたら、ツイッター <http://twitter.com/pleaseinupplease> でお知らせしますので、もう暫くお待ち下さいませ。

仲の良い方はさらにラブラブに、喧嘩中の方は仲直りして。

皆様も素敵なヴァレンタインを！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0498q/>

魔法を信じるかい

2011年7月30日03時25分発行